



セ  
ッ  
ク  
ス  
し  
た  
。

酔  
っ  
た  
勢  
い  
で

BBB  
unofficial fanbook  
Steven x Zapp

R-18



セ  
ッ  
ク  
ス  
し  
た  
だ

酔  
っ  
た  
勢  
い  
で

BBB  
unofficial fanbook  
Steven×Zapp

R-18

酔った勢いでセックスした。

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。  
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

酔った勢いでセックスした。



酔った勢いでセックスした。

夜の街では少々名が通っているレベルの遊び人、ザップ・レ  
ンフロであるからして、普通だったらそんなことでは驚かない。  
朝起きたら見知らぬ女と見知らぬベッドで裸で眠っていて、  
名前すらまったく思い出せないがとりあえず作ってもらった  
朝食を平らげたうえで彼女の家から出勤する、ぐらいなら彼に  
とっては大して珍しくもない話なのだ。宵越しの銭は持たない  
ヒモ暮らしもここに極まれり、のらりくらりと生きているだけ  
に、ちよつとやそつとではビビったりしない自信がある。  
で、だ。

そのザップ様がなんで驚いていたのかというと、昨夜の相手  
が見知らぬ女ではなく、それどころかよく知った同性の上司で  
あったからだ。ふたりして全裸。仲良くベッドにイン。床  
に散らばる互いの衣服、そうして違和感バリバリの尻穴とくれ  
ば、さすがのチンピラも半泣きになるしかない。ともかく事実  
を確認したくて、目覚めたばかりのザップは動揺に震えつつス  
ティーブンの肩を揺すった。

「ス……、スタ、スターフェイズさあん……！ 起き、あの、  
起きてください……！ これ、なにがあつたんすかあ……!?!

お、俺、まさか、あんたでロストバージン……!?!」

がばつ！と起き上がった伊達男の表情が一変、異界産のグロ  
テスクなゲテモノを口に突つ込まれたような形に引きつる。そ  
の賢いおつむで一切の状況を理解した彼は、神にでも祈るかの  
ごとく一瞬天井を仰いだかと思うと、両手で顔を覆って絶望  
に沈んだのである。「なんてこった……」と呟きながら。

「ああ？」

なんだかイラつときてしまった。確かに昨夜のことはなにも  
覚えちゃいないのだけれど、なんてこつたって、なんてこつた  
ってあんた。掘られたのはこつちなんですすよ。勝手に掘つとい  
てんなクソでも食わされたみたいな顔せんでも。俺はクソかよ。  
いやまあそりゃああんたは昨日俺のクソの穴に突つ込んだん  
だろうけども。

露骨な文句がそのまま口から飛び出なかったのは、相手の気  
持ちも分からんでもないからだ。もし逆の立場だったら自  
分だって、どう反応したか分からない。しかしそれにしたって  
最低限のモラル的なものはあっていいはずで、女のように受け  
入れる機能がない人間を手籠めにしてくれやがったのだから  
せめてごめんとか、身体は大丈夫なのか、とか、そういった声

掛けをしてくれたついでいいのに。けれど、こつちからそういうこともを要求するのもおかしいような気がする。

ザップが己の中で悶々と格闘している間も、ステイブンは石像にでもなったかのように動かない。悲しみに暮れる様子がちよつとばかりさまになってるのが非常に癪に障った。これだから色男つてのはずい。

「は————……」

ザップは大きく溜息をついた。秘密結社の番頭役、臨機応変に作戦を組み替え前線に指示を出す参謀、そんな彼が、こういふときには意外とまともに振舞えないのは意外だった。なんなら掘られた自分の方が、よほど落ち着きを保っている。むしろそこまでショックを受けられているとなると、それはそれで逆に腹立たしいのだが。

持ち前の切り替えの早さで、ザップはベッドから下り、黙って衣服を身につけた。女相手であればこういう時間のうちに多少のリップサービスもしたであろうが、今回はこつちが女役だし。労われているわけでもなし。なら、こうするしかないのだろうか。

「も、俺、帰りますんで。なにがあつたか覚えてないですし、

あんたも覚えてないんでしょ？　つてことで、いつも通りでお願いしますね」

背中を向けてそう言ったので、ステイブンがどう受け取ったのかは分からない。ただ、返答がない以上、彼もこの話に乗ったということだとザップは判断した。

「んじゃ」

部屋の扉を開けると、見覚えのない廊下に出た。手当たり次第にずんずん進んで家の外へ出て、これまた見覚えのない街並みにぼかんとしながら後ろを振り返ってみる。

（俺、あのひとん家に連れ込まれてやられたんかよ）

閑静で、高級そうな住宅街。早朝ともあればなお静かだ。美しく穏やかな佇まいのなか、あらぬ場所がしくしくズキズキ痛んでいる、あまりにも場違いな自分。

（ツイてねえ……、マジでツイてねえ……）

ひどく惨めな気持ちで、とぼとぼと歩き出す。手元のスマホ

で確認してみたなら、最寄りの駅まではまだかなりの距離があった。

\*\*\*\*\*

ともかくにも自宅に帰り、まずもってシャワーを浴びる。道中に垂れてきたのでぼぼぼ確信していたが、どうも直接なかに出されていたらしい。尻の穴に指を突っ込んだら、とても一回ではないであろう量の精液があとからあとから出てくるのには閉口した。

（あんひと潔癖っぽいのに意外とこういうところだしねえんだな!?)

職場の部下に中出しするなんて、と憤りを覚える反面、孕む可能性がないのだからある意味合理的なのかも感じて、なんだか余計に腹が立つ。イライラに任せて支度して、思いつき遅刻して出勤してやったが、さすがに今日はステイプンに咎められることはなかった。

フンと鼻を鳴らし、後輩のもじやもじや頭に手を伸ばす。「思

いつきり重役出勤してきてなんなんですかその態度アンタ——」という罵声を遠くに聞きながら、ザップは自身の胸に、繰り返し念じていた。

——忘れろ。

——忘れろ。

——要るもんは要る。要らねえもんは要らねえ。それだけだ。

——できる、俺なら——

（大丈夫）

幼い頃より檻褌雑巾に強制された地獄のような修行も、ライブラという安住の地へ辿り着くまでに過ごしてきたかさついた時間も。良かったとはいわないが、前に進むために必要だったと思えば一応納得はできていた。

それに比べて今回の事件の、イレギュラーではあるが些末なこと。もともと性に対して奔放なザップだけに、感情の処理はそこまで難しいことでもなかった。

ま、人生こーゆーこともあらあな。

そんな台詞で一刀両断。そして本当にスパッと、そのことについて考えるのを止めてしまったのである。

彼の生きてきた道の困難さにしてみればそうでもないことや  
 ってこれなかったのだろうが、それにしても。あまりの思いき  
 りの良さ、他者からの理解を得難いまでの器用さは、この後の  
 展開の悪化に、残念ながら一役買ってしまつたのである。

\*\*\*\*\*

それから一か月が経とうとしていた。ザップの言葉通り、ス  
 ティーブンとはいつもと同じ関係が続き、もはや本人もあんな  
 出来事をすっかり忘れ去つていた頃だ。

今夜も、パーティー好きのボスの厚意で、難事件を解決した祝  
 勝会が開かれていた。

勝利の余韻にどことなく浮かれている面々、陽気な笑い声、  
 美味いつまみにアルコール。薄暗いバーにはザップの好む要素  
 がずらり揃つていて、これではしゃがないわけもない。他人の  
 金で飲む酒万歳とばかりにグラスを煽り、ほうぼうを回つては  
 肩を組んで騒いで、また飲んで。すっかり出来上がったザップ  
 はふらつきながら、しかし新たな酒を求めてカウンターへと向  
 かおうとしていた。

「おい、ザップ」  
 「ほえ？」

突然ぐいと腕を引かれて、転ぶかと思いきやローソファに着  
 地した。隣には見知つた傷顔の上司が座っている。きらきら輝  
 くムーディな照明が、伊達男に華を添えていた。

「お前飲み過ぎだぞ。そんなに飲んだらまた……、」  
 「また？」

「いや……、とにかく飲み過ぎるな。セーブしろ、セーブ」

赤らんだ頬さえ幼く見えてしまうくらいの子よとんとした  
 顔つきで聞き返され、スティーブンは眉をしかめて口ごもつた。  
 そんなリアクションに爆笑すらしめてみせて、酔っぱらいは歌う  
 ように切り返す。

「おーおーおーげさつすよ番頭お！　そこらのザコに取つて  
 喰われるほど弱っちい俺ちゃん様じゃないですしい？　うま  
 いタダ酒があるんならどこでも！　パラダイスつてやつです  
 からね〜！」

スティーブンは絶句した。見事に言葉を失つた。

ついほんのひと月前に、ぱくつと喰われちゃまったばかりだろうお前。なんだその警戒心のなさは。お前にとつてあのことは、そんなに軽い出来事だったのか。僕にとつてあの夜にあったことは、とても、とても——。

ぐつと唇を噛み締めるステイブンをよそに、なにが面白いんだか、ザップは空中を指差してげらげら笑っている。狭いソファで姿勢も正さないで、ザップの身体はステイブンの腕にすつかり寄りかかっていた。彼の重みと、すぐそばにある体温を感じ、ステイブンの喉が鳴る。悪いことだと分かっている、どうにも止められるものでもなかった。

「……なら——」

ああ、口が開いてしまった。

「——うちにいい酒が何本か置いてあるんだけど」

断れ、断つてくれ。頼む。ザップ。

「ここ抜けて、飲み直さないか？」

「えーマジすかあ？ 行く行くうー！」などという返答に既視感を覚える。当たり前だ、誘い文句からして前回とまったく同じなのだから。あの晩のことをまるきり覚えていないのであればそうなくても仕方ないのかもしれないが、あんな目に遭ってもちつとも懲りていないなんて、ほんとにお前。

ステイブンは内心舌打ちをしていたが、覚悟はとつくに決まっていた。ああいうことがあったにも関わらず誘いを断られなかった、それがすべてだ。すでに賽は投げられてしまった。獲物を前にしたほの暗い高揚と、そうしてどす黒い怒りが、ステイブンの腹で渦巻いていた。身勝手だとは知りつつも、あの夜をなかったことにされるのが、どうしても嫌だったのだ。

\*\*\*\*\*

「……」

しゅるりとネクタイを外し、ステイブンは己の寝室で、ベッドを——正確にいうならそこに横たわる泥酔状態のザップ・レンフロを見下ろしていた。

ここで彼を、この角度で眺めるのは二度目だった。男のくせ

に男に抱かれて、嫌な思いをしたらどうに。このバカは同じ方法で二度もこうして狼のねぐらに連れ込まれ、美味そうな身体を無防備に曝している。

「……っ」

ごくんと唾を飲む。先日味わった、彼の味を思い出す。まさかそこまで阿呆じやあるまい、と疑ってかかっていたのを裏切って、ザップはほいほいステイブンの自宅についてきたし、いい酒をすすめたらあっさり酔いづぶれてくれた。

途中で逃げ出してくれば良かったのに、リビングから寝室のベッドへ抱きかかえて連れて来ても、安心しきってふにやふにやになったままである。お前、この前俺に犯されたばかりなんだろうが。じとりとした視線で彼をにらみつけても、格好の餌食、だとか、据え膳、だとか、そんな単語が次々浮かんでくるばかりだった。

前後不覚になったところを食うだけなら、先回と同じになつてしまう。ならば、とステイブンは、わざと鋭い殺気を放つた。

「ッ!？」

途端に、気持ち良く酒気に浸っていたザップの顔色が変わる。飛び起きてステイブンを見、状況を把握しようと部屋に視線

を走らせた。

「さすがの反応だな」

「……ッ!？」

皮肉交じりに褒めてやって、押し倒しがてら唇を奪った。瞼を閉じることもできずに目を白黒させているザップの舌をぢゆう、と吸い、先端を甘噛みする。宣戦布告のキスを施して、ステイブンはザップと近距離で向き合った。不意打ちをくらった彼は、未だに驚いた顔のままだ。

「……え!? え!？」

「……言つとくがな。僕の誘いに、お前がついてきたんだぞ」だから無罪なのだ、そう主張するつもりもないが。先日と違って覚醒しているザップを前に、しかしながら勝算は揺るがなかった。むしろ、彼を追い詰めるにはこの方法が最適なのだとすら思う。

「……ス、タ……! んんん……っ♡」

まだ事態を飲み込みきれしていないのにも容赦せず、深く深く口付ける。ベッドの上でのそれも込みでハニートラップを仕掛ける男の経験則からすると、負ける気は微塵もなかった。キスは呼吸も許さないほど強引に、唾液を押し込んで立場の上下を教え込ませ、それでいて身体に触れる際にはあえて焦らして——、と、初回の情交の際心得た要領で性感を急激に高めてやる。

真正面からぶつかれば戦闘力そのものはこちらが劣勢、頭脳勝負に持ち込んでようやく五分五分、そうステイブンは見込んでいるけれど。今だって本気で暴れられればそうとう厄介なのだが、すべてがステイブンの予想通りに進んでしまっていた。なにせ、彼は感度が良すぎるのだ。案の定、銀の瞳は快感にとろけ、もっとうくださいとねだっているかのようだった。

「……………ふえ……………?♡」

「ああ、ザップ……………♡」

あのとときもすごかったが、きちんと意識を保っていたにも関わらず流されてしまっている、今回の方がよほど本能にグツとくる。あまりにも自由なこの男が己の与える快樂の前で身動きがとれなくなっているのだと、そう理解すればするほど下半身に血流が集中するのを感じた。

「あ、あなた、また酔って……………」

「……………はは。どうだろうね」

酔ってるのかって? そうだ、酔っているとも。なににとは言えず、ステイブンは笑って誤魔化す。口付けながらザップのトップスを脇までめくりあげ、あちこち傷のある肌に直接触れた。

「……………っ!♡」

「おやおや……………♡」

一か月ぶりに触れる彼の素の肌は、それでもステイブンを

歓迎しているように見えた。やわやわ撫でて煽ってやるとぶわ、と一気に鳥肌を立たせ、折れそうなくらい細い腰が期待を滲ませて細かに跳ねる。

「お前はあの夜のこと覚えてないって言ってたけど……………。カラダの方はしつかり、僕のこと覚えててくれたみたいだね……………」

♡「……………♡」

触つてもいないのにびんと勃った乳首へステイブンがかじりつけば、ひととき大きな嬌声が上がった。はっとしたザップが思わず、自分の口を両手で塞ぐ。邪魔が入らないのをいいことに、ステイブンは左右の乳頭を、唇と指とで同時に愛撫し始めた。

「……………ちよ、つと、スターフェイズさんん……………っ!♡」

「この間もここですごく善がってたもんなあ。こんなカラダしといて、プレイボーイ気取りだなんて笑わせる……………♡」

ザップの思考は未だ現状への困惑という段階で止まっており、こんな危機に対応などできるはずもなかった。しかし身体だけは与えられる快樂にのぼせあがって、勝手に昂ってしまった。そんな場所をいじられてどうかなるなんてまさか女でもあるまいし、と、脳内で否定してみたところでおおさら混乱するだけだった。

おまけに、「この間も」と言われてしまうと反論すらできや

しない。覚えていないのは事実だけれど、確かに、己のこの反応はどうもおかしい。こんなの、誰かに開発されてしまったとしか――。

「ひあうううううんんん……っ！♡ あ、あ、いやら、いやらああああああ……っ！♡」

「んー……♡ ……こんなに尖らせちゃって、はは……♡  
♡ 気持ちいいんだね……♡ ……カワイイよ、お前……♡」  
「……………♡ あああああ……っ！♡」

左右いつぱんにぎゅうつと摘ままれてしまつて、こらえきれずに喘ぎが漏れる。頭が現実を追いつかず、動揺から視界まで潤むのに、興奮ぎみにこちらを見つめている伊達男の表情だけはよく分かった。

「……イってみるよ。ここだけで、イってみる……！♡ もう二回目だからな、お前ならイけるだろ。なあ、天才のザップ君？ こっちの才能もあるなんてなあ……♡ ほら、見ててやるよ。乳首いじられるだけでイってみな……♡」

「っひ、ぐ♡ うううん、んんん……っ！♡」  
撫でてこすつて摘まみ上げて、男っぽく太い指のくせに、動きはやけに繊細だった。それに、なにより良くないのは彼の視線だ。甘ったるく目尻の垂れた紅鷲色の双眸が、一瞬たりとも見逃すまいと高揚しつつじつとこちらを見つめている。凝視といつてもいいようなその力強さに、己の内側まで暴かれてしま

うような気さえした。そんなのは嫌だし、怖いし、逃げ出したいの。とにかく熱くて、身体が熱くて、やけに周りにはあはあうるさい思つたら、それは自分の呼吸音だった。感じてしまつていると変に自覚させられたのと同ほ同時に、赤く熟れた尖りをぎゅううううう……っ！♡と引つ張られる。

「あ……、あつ！♡ だめ、乳首だめっ！♡ そんなにしたらだ……っ、ひいいひいいひいいひいっ！♡ んんんんんん、いやら、いや……っ！！♡」

肉の薄い胸が引き上げられ、育ちかけの乳房のようにかたちを変える。びん♡びん♡びん♡びん♡びん♡びん♡と連続して摘ままれて、おまけにぎゅうつとひねられてしまったならもう限界だった。

「ふああああああああああつ！♡ ああああああ、あ……♡」

ザップは仰け反り、快感の発生源となつた胸先を突き出しながら淫らに喘ぐ。押し掛かれているがゆえに自由のきかない下半身を小刻みに前後させ、着衣のままに射精した。じつとり湿った布の温さに罪悪感を覚えつつ見上げれば、べろ、と舌なめずりをする狼と目が合つてしまう。

「……はは♡ 上出来、上出来……♡」  
「ひううううう……っ♡」

まだ少し硬度を保っているペニスへ、ボトム越しにステー





っ♡ 怖いからやだっ、やだああああああ……っ！♡」  
 「落ち着けてっザップ……♡ だーいじようぶ、ちゃんと入る♡ この間だっ入ったし、ほら、ほら、よく確かめてっらん……♡ お前のこころ、お利口さんに僕のを銜え込んでくれているからさあ……っ！♡」

「んおおおっ♡ ほおおおお……っ！♡」  
 ずるるる、ずる♡と入り込んでくる異物の感触に集中してしまうのも、それはそれで良くなかった。大きくて、太くて、いやらしくびくびくしているものが己の内に入ってきているのだ、と思うと、頭が変になりそうだった。極度の恐怖と緊張は、もしかしたら、興奮によく似た作用があるのかもしれない。そうでなければどうして、こんな風になってしまっただろう。望まぬ侵略を受けているのに、ザップの性器は、また勃起し始めていた。苦しいはず、つらいはずなのに、どろどろとした熱に全身が支配されつつある。

「……っ！♡ ……ね、入っただろ……♡」  
 「……………っ！♡」

ず！♡と奥深くまで穿たれて、ザップの尻とステイブンの下腹とがびったり触れ合う。繋がったままザップに押し掛かり、ステイブンは艶っぽい声色で喋り続けた。

「あー……気持ちいい……♡ お前のなか、気持ちいいよザップ……♡ セックス好きだろう？♡ 気持ちいいも

んなあ、俺も、お前も……♡」

「……っ、あう、う……♡」

「さあて、動くよ♡」

「！♡」

一瞬間悟したけれど、想像したような痛みは来なかった。激しく抜き差しするのではなく、ステイブンは挿入した状態で、ゆさゆさ腰を振っている。自分の快楽を優先しがちなザップであれば絶対にしないような責め方に、テクニクの優劣を突きつけられた気分になった。硬いもので胎内を掻き混ぜられたなら、女みたいに甲高く喘ぎが漏れてしまう。

「あ、あ、あ、あ、あ……っ！♡ ナカ、が、ナカああああああ……っ！♡」

「ん……？ 気持ちいいかい……♡」

「ひえあ、う、うううう……っ！♡ んあああああ、あ……っ！♡」

びつたりくつついて、ひとつの大きな熱の塊のようになって互いに息を乱す。上司であるステイブンに耳元で囁かれると、まるで命令を受けたかのように誤認して、自分の価値観がどんな書き換えられてしまう気がした。肝心の記憶がない分、ある種未知とも言える受け身の感覚に対して、これは「気持ちいいコト」なのだと言ったと勝手に定義づけがなされてしまう。己は気持ちいいことが好きだったはずだ。セックスが大好きだったはず

だ。ではこれは？ 犯すのではなく、犯されるセックスは――。

「んにやああああああああああああ……っ！♡」

考える猶予も与えてもらえずに、新たな刺激がザップを襲う。ステイブンは肉棒でザップを挟りながら、耳殻を舐め、おまけに両手で乳首をいじりだしていた。思わず身体を跳ねさせても組み敷かれている以上逃げ場もなく、ただ醜態を曝してしまっただけだった。

「あ、あ、それだめえいっぺんにすんのだめっ！♡ むりっ、むりですうううやだやだやだやだやだっ、やだああああああああああああ……っ！♡」

「ん、これ好きか♡ そうかそうか、気持ちいいね……♡」  
「っひ、あ、！♡ あう、あう、あ……っ！♡」

これが好きなんだ、気持ちいいんだ、と、本人は置き去りで、身体に教え込まれてしまう。ザップのペニスは完全に反り返って、歓喜の涙を幾筋も滴らせていた。こんな嫌だ、恥ずかしい、でも気持ちいい。全部がないまぜになって、どうしたらいいのかなんてまるで分からないまま、嬌声だけがだだ漏れていく。

「あ、あ、やら、いやあまたイク……っ！♡ またいつちやう、イヤだ、やあ、イきたくない……！♡ 俺、もお、こんなので

イきたくな……っ！♡ んんんんん、んんっ!♡」

「そう？♡ 残念だな……っ！♡」

「……ひ……っ♡」

なんてことを言ってしまったんだ、と気付いたところで遅すぎた。イきたくない、という発言を受けて、ステイブンは片手でザップの竿を握り、そこを握き止めてしまっていた。そのうえ、逆の手では胸の尖りをいじりつつ、また腰を揺らし始めるのでたまったものではない。行き場を失くした切迫感、たちまちザップを追い込んでいった。

「……っああああああああ!♡ イ、けな、それじやイけないっ！♡ スターフェイズさんっ、スターフェイズさ……っ！♡」

「イきたくないんだろう？♡」

「やああああ、ああああああああ……っ！♡ 揺ら、揺らさないでええええええ……っ！♡」

ゆらゆら揺れるステイブンの動きに翻弄され、乳首をきつく摘ままれては悲鳴を零す。必死に抵抗をしたって、勝てる見込みはゼロだった。握られっぱなしの性器が苦しくて切なくて、ザップの唇の端からたらりと涎が垂れ落ちる。戦場ではどんな拷問を受けても屈したりしない男が、なにものにもとらわれなはずだった生き物が、とうとう快樂に膝を折った。悔しそうに、細く、細く。ザップの喉が、空気を震わせる。



はなにがしたいかって、きつと——。

「く、うううううううううう……っ！♡」

悔しい。ザップは自他ともに認める意地っ張りだ。なのに、こんな風に好き放題されて、意のままにされなくてはならないなんて。それでも、快樂に弱い男にもう道は残されていない。人形のごとく揺らされながら、急所である喉を反らして曝す。そんなジェスチャーで訴えたところで軽やかに無視されてしまい、銀灰の瞳には涙が滲んだ。ザップの竿は相変わらず張り詰めて、より深い悦を切実に求めている。

「い、て、……もつと……♡ 本気、ど……♡」

「ん？♡」

「くくく突いて、つてばあ……♡」

「うん……♡」

縫るように小声でせがんでも、ステイプンは乗ってこない。それどころか細腰を揺すぶって、さらに続きを促しているかのようだ。

「スタ、フェイズさあん……！♡ おれ、俺……っ！♡」

「ああ、うん、そう……♡ 呼んで、もつと……♡ 大きな声で、ザップ……♡ おねだりして、何が欲しいかって♡ 誰の、何で？♡ どこを、どうされたい……♡ 誰の、どんなので、どこを、どうやって……、滅茶苦茶にされたいんだ？♡ ザップ、さあ、言ってらん♡ さあ、ほら、早く……♡

っ！♡」

「んううう、くくくくくくくく……っ！♡」

ぎゅううう、と両手で臀部を鷲掴みにされる。薄い肉に指が食い込んで痛いくらいなのに、そんなわずかな刺激ですら決壊のきっかけになってしまった。ステイプンの垣間見える強引さに、どうしてだか流される。流されたくなくなってしまふ。めちやくちやにされたい。だなんて、思ったことなどないはずなのに。気付けばザップは表情をぐずぐずに崩して、甘えた声でこう言っていた。

「あ、あ……！♡ スタ、スタあ、フェイズさん……っ！♡ あんたの、あんたのつ、ちんぽで……！♡ あんたの、でっかいのでっ、俺のケツ……！♡ 突いて……っ♡ 突いてっ、ガン突きしてえっ！♡ イイとこ、分かってんでしょ……っ！♡ そこ突いてよおっ！♡ 俺のイイとこあんたのので突いて……っ！♡ いっぱい、いっぱい突いて、あんたのちんぽで俺のこと、メチャクチャにい……っあ、おとおおおとおおとおお……っ！♡」

「上出来だ……っ！♡」

「ん！♡と待ち望んだひと突きがザップの弱い部分を抉っ

て、一瞬で絶頂まで追い込んだ。思いきり仰け反った褐色の上  
半身を背景に、ぴゅっ♡ぴゅるるるるー~~~~♡と、  
敗北の証が射ち上がる。

「つあ！♡もおイ、イってりゅっ！♡おでっ、イってり  
ゅからあああああああ……っ！♡」

「見りや、分かる……さ！♡このっ、この……っ！♡」

「!!♡!?♡うあ、あああああつ！♡やああ、あ  
あああああああ……~~~~♡」

怒ってでもいるのかと疑うほどの勢いで、ステイブンプンがザ  
ツプを犯す。猛烈なスピードで「ごん！♡ごん！♡ごん！♡ご  
ん！♡と肉穴を突くので、ザツプは髪を振り乱しながら泣き  
わめき、そのまま再度射精した。やや薄い白濁が、あつちこつ  
ちにびゅくるるるっ！♡と飛び散っていく。

「……思った通りだっ、エロい身体しやがって！♡逃がさ  
ないからな、ザツプ！♡恨むんなら俺に捕まっちゃまった自  
分の迂闊さを恨め……っ！♡」

「ひっ!?♡あ、なに、なに……っ!?♡」

連続で果てたトロ顔を歪ませて、ザツプが悲鳴を上げる。そ  
れもそのはずで、ステイブンプンはザツプの陰茎をがっしと掴ん  
でいたのだった。散々出した精液のぬらつきを借りて、上下に  
力強くしごいてやる。

「うあ!?!♡つちよ、おれイったばっか、だからあつ！♡

触らないでっ！♡ちんちん触ないでスターフェイズさあ  
あああああんっ！♡」

「はは、す……っ♡手応えあり、だ♡ザツプ、イけよ、  
このまま、ほら……っ！♡今キてるだろ、これでイったら物  
凄いで……!!♡」

「んん!?♡んんんっ!?♡ふえ、なん……っ！♡ああ  
ああ、あああああああ……??♡」

イってわめいて涙を零して、パニック状態の神経を一気に塗  
り替えるみたいに、なにかが腹の底から湧き上がってくる。自  
分自身にはまったく状況が理解ができず、けれどステイブンプ  
ンが訳知り顔で口角を持ち上げているのがとても理不尽だと思  
った。しゅ♡しゅ♡しゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぢゅ♡とペニ  
スを刺激されると、独りでに腰がかくかく揺れてしまう。自慰  
をしているみたいで恥ずかしいのに止められなくて、あ♡あ  
♡あ♡あ♡と唇からは意味のない単語が漏れる。ステイブンプ  
ンの言っていたように、なにかの訪れについてだけは確信があ  
った。なにか、なにか来る。経験のないものが、「物凄い」も  
のが、もうすぐそこまで迫っている。止められない、止まらな  
い、これ以上はいけないと分かっているのに、それなのに――。

「あああああつ！♡あああ、っひあああああああああ  
あああああああああああああああああああああ……

「~~~~~」

濁った喘ぎは、さながら断末魔のようだった。それと同時に、ザップは無色透明な体液を尿道口から噴き上げていた。ぶしゅううううううううう……っ！♡と射出したそれは、精液というには薄すぎる。強張りの抜けない身体で、ザップは情けなくベソをかいた。

「っあ……!!?♡ あ、俺え、しょんべん漏らし……っ!!?♡」

「あは……♡ 違うよザップ、これ潮だ……♡ 女と一緒にだよ、男も出せるんだ♡ こんなにうまくいくなんて、こっちもビックリだけどねえ……♡」

「な……!!?♡」

潮吹き絶頂。ポルノではお馴染みのシチュエーションだし、そういうのが得意な愛人だってザップにはいる。

ただそれを、自分がやってしまったというのだけは納得できなかった。だって、そんな。イヤラシイ女の代名詞みたいなやつ、鑑賞されて消費されるだけのほしたくない行為を、まさか、俺が。

「っううううううんんん……っ！♡ ひやめっ、ちんこっ、やめええええええええええええええ……っ！♡」

「はっは♡ すこいなこれは♡」

思考を中断せざるを得ないペースで、ザップは次々に潮を噴

いていた。ステイプンが巧みな指遣いで裏筋を擦り上げると、いとも簡単に淫液が飛び出していく。びゅくんっ！♡びゅくっ！♡びゅくっ！♡びゅくっ！♡びゅうっ！♡と恥ずかしくなるくらいに元氣よく潮が弧を描き、そのたびザップの内壁がぎゅっつと締まった。肉壁の歓迎を受けて、ステイプンの雄がますます膨らんでいく。

「おっ！♡ お♡ 潮っ♡ 止まんにやっ♡ やめへっ！

♡ いやにやのっ！♡ 潮おおおおおお……っ！♡ むりっ！♡ これむりっ、潮吹きなんてもおこれ全然むりい  
いいいいいいいい……っ！♡」

「ザップ……♡」

とうとう上半身を支えきれなくなつて、ザップはずるずる崩れ、ステイプンに身を預けた。びくん！♡びくん！♡と絶頂に伴つて不自然に緊張するくせ股だけは変に脱力していて、蛙を思わせる無様な形で脚が開いてしまっている。ステイプンはザップの男性器を責めていた手を外し、チョコレート色の尻肉を左右とも、目一杯の強さで挿んだ。

「ほんつとーにカワイイな、お前……！♡ アナル初心者なのに、潮噴きまくりでアヘアアアクメかよいやらしい♡ ほら、このままじゃなかに出されちゃうぞ♡ また中出しされちゃうぞ♡ いいのか？♡ ヒモ暮らしが自慢のスケコマシなんだろ♡ 逆にこまされちゃう気分はどうだ？♡ な

あ、ザップ♡ つぁーイクイク、もうイク……っ！♡」

「っひ！♡ あ！♡ おんっ！♡ ちんぼっ！♡ 刺さるうううううう……っ！♡ ひ、ぎいいいいっ！♡」

臀部を握って渾身の力で上下させるので、ザップの肛門にはステイブンの肉棒が先端から根元まで、何度も何度も出入りした。ばちゅんっ！♡ばちゅん！♡と互いの肌がぶつかり合う音が絶え間なく鋭く響いて、聴覚からも昂っていく。

「っ、ザップ……！！」

「あ、あ、あ、！♡ やだあなか、なかつ、出され……っ！♡ ひんんんんんっ、んんんんんんんん……っ！♡ ……っ！♡」

「……っ、ははは♡ 何お前、中出しされてイってんの……♡」

ステイブンが小さく笑うが、答える余裕はどうにない。とぶ♡どぶ♡びゅくん♡とアナルに射精された衝撃で、ザップは極まってしまっていた。ぶしっ！♡ぶしっ！♡とステイブンの腹に潮を撒き散らしながら、ザップの身体は幾度も繰り返して痙攣している。

「……中出し好きなんだよなあ、お前……♡ この間もそうだった♡ だから一回きりじゃ、やめてあげられなくて……♡

♡ いいよ、今日もたくさん注いであげる♡ いっぱいイきな♡ お潮噴いてイきな……っ！♡」

「……ひいっ、！♡ あ、が、ちんぼおおおお

おおおおおおおおおおおおっ！♡ でっかいのがケツ、に！♡ あ、あ、おか、し、おかしいっ、ケツんなかおかし

いいいいっ！♡ ちんぼでおかしいっ！♡ ちんぼっ、ちんぼでケツが変にされひゃ……っ♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ ちんぼおおっ！♡ でかちんぼでケツがっ！♡ きも、きぼちいいいいいっ！♡ ちんぼでケツ気持ちいいっ！♡ でかちんぼでケツ、がああああああ

ああああああ……！！♡ あっあ、これ好きいっ！♡ ちん

ぼでっかいいいいいいいいっ♡ でっかいちんぼきぼちいいいいいいいいいいい……っ！♡ でかちんぼでケツがっ♡ きぼちいっ、でかちんぼきぼちいよおおおおお

おおおおおお……っ！♡ おっ♡ お♡ おんっ♡ ほおおんっ！♡ あああ、あああ

ああああああああああ……っ！♡ ……くく♡」

ぴったりくっついた状態で淫らに喘がれるから、ステイブンの雄はすぐに勢いを取り戻し、ふたたび硬く太くなる。その剛直で悦いところをぶち抜いてやったならザップは肢体を跳ねさせて、声が囁れるまでペニスの俗称を叫び続けた。ナニが大きくて悦い、なんて言われて悪い気がする男がいるはずもなく、ステイブンは自慢げに、ザップの媚肉へと肉棒を深く



ひとことだった。雄汁によって彼の奥底の雌を暴く恍惚はなにもにも代え難く、悦びに腰を打ちつけ、白濁を胎内に放ってやればまたザップが甘く鳴き、「ちんぽイクっ!」♡ ザーメンイクっ!♡ 中出しでイクっ♡ 中に出されてイっちゃいまひゅううううううううううううううううううううううううううううう……♡」と叫んで潮を噴く。そんな姿にたまらなくなつて、ステイブンの雄はまたしても復活してしまうのだった。もはや正常な意識が保てていないのであるうかひとの耳に、切羽詰まった声で囁く。

「中出し好きだな♡ お前本当に中出しが好きなんだなあ♡ このすけべ♡ 変態……♡ なあ、もうほんとに惚れちゃまえてよ♡ たつぷり中出ししてくれるでかちんぽに♡ 前のカラダにびつたりフィットした、僕のおつきめちんぽ好きになつて♡ 好きになつてくれ、ザップ……!♡ 僕のこと好きに……♡ 好きになつちまえて、いくらでも中に出してあげるからさ!♡ なあザップ、ザップ……!♡」

「んんん♡ おお、ああ、ザーメンしやまた来るうううううううううう……♡ イくっ、お潮出ちやう……♡ つ♡ あつあつちんぽ♡ ザーメン♡ おちんぽつ♡ でかちんぽおとおおとおお……♡ つ♡ イイツ♡ イイツ……♡ イくう、イクうううんっ!♡ あああああああつ、あ……♡ はひ、あ、

あはああああああああああああああ……♡ つ!♡」

まともな言葉も喋れない唇は唇で塞ぎ、延々と潮を垂れ流し続ける哀れな肉体を一方的に食る。まるでマージングするかのように腹の中へ精を吐き、このかたちを覚えるといわんばかりに、張り詰めた楔でうねる肉壁を抉つた。

「ザップ、ザップ……!♡ 俺のもんになればよ、頼むから……♡ つ!♡ きつと俺ただぞ、お前をこんなにしておられるの♡ なあ、ザップ♡ そう思うだろ、ザップ・レンフロおとおおとおとおお……♡ つ!♡」

「……♡」

声もなく果てて果てて、白目を剥いて気絶してしまったザップからは当然いらない。ステイブンは愛しい身体を掻き抱いて、最後にもう一度、その胎内に射精した。

\*\*\*

酒の上での過ちぐらい数えだしたらきりが無いのだが、同じ相手と二回目の失態っていうのはちよつと経験がない。それも同性で。職場の上司で。おまけに初回の記憶はすつ飛んでいたらまだしも、二度目のことは断片的にだが頭の中に残っている

た。

えげつない快樂。何遍もイカされて、女のように潮まで嘔かされて気を失うまでヤられまくって。夜が明けきる前に気付いて彼の腕から抜け出し無事逃げおさせたけれど、数日経った今でも信じられない。ほんとに、夢じゃないんだろうか？

(俺、このひとにメチャクチャにされたんか……)

普段と変わらない様子で毎朝恒例のブリーフィングをしているステーキブンを、そつと視線だけで捉える。この色男はいつたいなにを考えているんだろうか。この間はあるななに参加したくせに、自分から部下を誘って、プライベートな空間で抱き潰したりして。

(男が好きなのか……?)

まさか、と即座に疑問が打ち消される。彼がいかにもパトロシク小さい美女を連れ歩いているのを何度も見たことがあるし、先日のあの、絶望っぷりといったら。女のアナルだろうがザツプのアナルだろうがやり心地は大差ないだろうが、やはり酒の勢いでうっかり男のそれを犯してしまったというのは派手な失敗だろうし、己が被害者でなければそれなりに同情すらしてやるところだ。

(だし、なんで二回目なんだよ)

懲りないやつのだ名詞である自身は置いておくとしても、ステーキブンの性格上、同じミスを二度してしまうとはどうてい

思えない。過失でないなら、故意なのか。しかし意図的に野郎のケツを掘るといふのもどうにも腑に落ちない。抱くなら女が一番であって、彼の見た目であれば一晩の遊びにも事欠かないであろうし、ましてや相手がザツプである必要もない。孕まないだけ、というなら、商売女に避妊薬でも飲ませれば済む話なのだから。それを買うだけの金もツテも、秘密結社の番頭役であれば当然持っているはずだった。

(あああー……つ、クソ……!)

ザツプの脳味噌は便利な忘却・および思考ストップ機能付きだが、なにかひとつのことを熟考するにはんで向いていない。ただでさえややこしい上司の腹の内なんて、そんなもの考えたって分かるわけもなかった。ザツプはがりがりと苛立たしげに頭を搔く。そうだ、事態は切迫しているのだ。

(……………やりてえー……つ!)

正確にはやりたい、ではなく、やられたい、のだが。

目の前の、いかにも伊達男然としたスケベ野郎をザツプは睨む。享楽主義の人間に未知の、それもどぎつい快樂を教え込んでくれたのだ。これが執着せずにいられるか。自分でもどうかしていると思うのだが彼の端正な顔立ちはあるん、どこか動きに艶のある節くれた指も、スーツで隠しきれない鍛えら

れた身体のラインも、そうしてあの、立派なナニをしまい込んであるであろう股間にも。ついつい、ちらちら視線をやつてしまふ。あの夜の熱さ、激しき、気が狂うほど善がった性感の深さを思い出す。

たとえば自身が女であったなら、なんとかして彼を攫つて二人きりになって、抱いてと迫つてやつているところだ。実際男で良かったんだか、そうでないんだか。

(……………)

ザップにだって、必要最低限の倫理観は備わっている。居心地の良い居場所を守りたいなら職場の人間と色恋沙汰は避けるべきだし、なんなら恋愛抜きでの肉体関係だつて褒められたものじゃない。ステイブンがザップに対してやらかした理由は分らないが、少なくともザップはそう思うからこそ魅力的なスタイルのチェインやほかのメンバーにも、むやみに手を出さないであつて。

ただ、どうしても、肉欲のやり場には困つてしまふのだった。あんなすごいのを知つてしまった以上もうなしではいられないし、肝心のステイブンには気軽に頼めないし。次に飲み会があつて、彼が酔っているみたいなのシチュエーションが発生したならお持ち帰りを期待してもいいのかもしれないが、そんなのいつ来るかなんて分からない。ザップは今すぐ欲しいのだ。あの気持ちいいのを、今すぐに。

(ちくしよ……)

顔色一つ変えずにミーティングを終える、傷顔の男が憎たらしい。なんとかしなくては、なんとか。眉間に皺を寄せて考え込んでいたザップは、ちらりとステイブンが彼を盗み見ていたことに、まったく気付きもしなかった。

\*\*\*

一日の仕事を終えてザップがやつて来たのは、いわゆるハッテン場とか呼ばれる飲み屋街だった。平たく言えば、性的対象が異性でなく同性である男たちが集い、出会い、ひとときの温もりや生涯の伴侶を得たりしている場所だ。これまで立ち寄つたこともなかったが、夜遊びの仲間から、なんとなく話には聞いていた。その筋の人間には有名なバーの名が書かれた看板をひと睨みして、ザップは肩をいからせ、やや警戒しながら中へと入つて行く。

「いらつしやい。あらア、初めて見る顔ね」

「まあな。お喋りは好かねえからほっといてくれ」

ドラアグクイーンというべきか、派手な化粧をしてオネエ言葉で話す店員に半分背を向け、ザップはカウンターへと腰掛ける。適当な銘柄の酒を顔すら見ずに頼むと、聞き分けのいい彼は黙って用意してくれた。ザップはグラスを傾け、ぐるつと店內を見渡す。

(なるほどね)

常連が多いのであろう店で、明らかにザップは浮いていた。格好も確かにそうだが、周りの視線がことさらにそれを際立たせていた。「新入りだ」「ノンケがからかいに来たか?」「こいつは上なのか、下なのか」と、品定めする男たちの目が一気にザップに集中している。

自分だってイイ女を見つけたら飛びつくし、なんなら美人じゃなくたって暇そうなら声ぐらいかけるけれど、品評される側に回るとさうとうに気分の悪い状態だった。俺は見せもんじゃねえぞ、と、イラついて、当初の目的も忘れてしまっそうになる。

「よお。隣、空いてるか?」

そう言って近づいてきたのは、髭面の、やたらにムキムキとがたいの良いスキンヘッドの男だった。皆がタイミングを窺っていたところを先んじて、その顔には嫌な感じの優越感があはつきりと表に出まわっている。そいつが己に下劣な視線を向けているのを感じて、ザップはうげエ、と半目になってうめいた。確かに穴を埋める棒を探しちゃいたのだが、ここまでなんでもいいわけでもないのだ。

「悪いが空いてねえ、消えな」

「固いこと言うなよ。この店初めてだろう、仲よくしようぜ」

「お断りだ。ボランティアじゃねえんだぞ」

「つれねーなあ。まあ、気が向いたら宜しく頼むわ」

髭面坊主はさして気にもしてない様子で離れていき、それを合図に次から次へと男たちがザップに言い寄ってきた。若そうなやつから初老まで年齢もまちまち、エリート風からヤクザくずれまで。しかしどうにもピンと来ない。

(なんか、もつと、こう……)

だって、身体を預けるのだから。軟弱な野郎は却下、それなりに強くて、顔だって不細工はごめん、身なりはもろろん香水の趣味が悪くない方がいいし、欲を言うなら声とか指とか仕

草とかに色気があるやつが良くて、たとえば高級スーツをさらつと着こなして歩けるくらいのも、同性から見ても文句なしにイイ男だと思えるような――。

(ああ?)

ぱつと脳裏に思い描いたのはステイブ・A・スターフェイズそのひとだったので、ザップは眉をしかめてイメージを振り払う。だから職場はナシだつてんだらうに。そもそも、酔った相手に無体をはたらくようなクソホモ外道強姦魔にこれ以上関わるべきじゃない。たとえ、セックスが鬼のようにうまかったとしても、病みつきになるような中毒性があったとしても、テクだけでなくナニもかくて、死ぬほど具合が良かったとしても、だ。

「……」

ザップは一瞬考え込んだ。あのすつげえのをもう一回体験しない手はない。それこそステイブに頼めば、酔わせる手間が省けたと言つて喜んで抱いてくれるのかもしれない。いや本当にそうだろうか。酔った弾みで男に走つただけで、素面でお願ひしたらドン引きされるのかもしれない。そんな理不尽な。

でもあり得ない話とも言い切れない、とにかくあのひとは腹ん中でのなを考へてるのかさっぱりわからん。面倒くせえ、とにかく面倒くせえけど、このムラつきが収まってくれないことには。

「や。ご一緒しても？」

「！」

大当たりだった。強いかどうかは知らないが、スラつとした長身、金髪、涼しい顔をした同年代くらいの男。モデルっぽい風貌は同性から見てもハンサムで、着ているものから選ぶ香水まできっちり高得点。ザップは思わず口を開いた。あとのはたひとつ、この点さえクリアしてくれば。

「俺はボトムだ。あんた、セックスうまいのか？」

ぱつと目を見開くも、似非モデル野郎は艶つぽく微笑んだ。

「そんなの、試してみなきゃあ分かんないだろ？」

切り返しとしては、まあ合格。ザップは黙って彼の手を取り、この会計と、ホテル代はそっち持ちだと言つてのけた。金髪男は驚いている様子だったけれども、意外とすんなりオーケーしたのでふたりしてさっさと店を出る。これで、準備万端。ベッドの上で天国をエンジョイできるかも、とザップは思ったのだが。

(……………?)

なんだかしっくりこなくて、軽く首を傾げる。小さな違和感も、職場の上司のわけのわからなさも、はつきりいつてザップには荷が重すぎた。その両方から逃げ出すみたいに見知らぬ男の手をぎゅつと握る。「積極的だね」と笑みを向けられても、ザップは無言のままだった。

\*\*\*\*\*

なんとなく、嫌な感じはしていたのだ。

モデル風イケメンと一発やってみたのだが、ザップの欲求不満はまったく解消しなかった。彼が下手くそだったのでなく

て、むしろ丁寧に抱いてくれたのだが逆にそれが煩わしかった。「もういいから突っ込め」と急かしてようやく挿入させても、充足には程遠い。結局彼とはその一回きりで、それから何人も別の男と寝てはみたものの、なにかが違ってしまった。

そもそもザップのお眼鏡にかなう人間というものがあまり多くなく、そのなかでやれナニが小さそうなの、やれキスが下手だったのいくらでもケチをつけられるので收拾がつかない。ラブホテルまで辿りつければ上々、ベッドの中での態度次第では「萎えた」と言い捨て相手を置き去りに即撤収、そんなことをしているうちに男日照りの期間が妙に長くなっていった。

毎晩出会い系バーには通っているし、声をかけられないわけじゃないのに。なぜだかどうも気にくわなくて、全然本番を試せていない。ザップは今夜も仏頂面で、もはや定位置と化したバーカウンターの一席を温めていた。

「よおー尻軽の仔猫ちゃん。いよいよオレの番が回ってきたか？」

「てめーの順番なんざ一生かかっても回って来ねえよ。すつこんでろこの筋肉ハゲ」

「つたくツラは最高なのに口悪いなあおい！」

初日に声をかけてきた髭面スキンヘッドとも、今となつては顔なじみだ。軽口もほどほどに、彼に背を向け酒を煽る。当初は大人しく引いていた髭男だったが、最近は少し粘るようにな

ってきた。今日も、許可を得ようとすらせずにザップの隣の椅子へ陣取っている。そうしてにやにや笑いを浮かべたまま、勝手にザップに話しかけてくるのだ。

「だーから男は顔じゃねえつつつてんだろ〜？ デイックの出来には自信があるぜ、オレあよー」

「うっせ。黙れ」

ザップがやたら面食いだということすら、もう皆に知れ渡っていた。まあ自分でもそうなんだろうなとは思ってから、適当にあしらってやる。

「顔が良くて？ 身なりが良くて、センスが良くて、おまけにチンコがでかくてセックスが上手いとか、役満狙うからハズすんだよ。ほどほどにしとけて。ナニがでかい、セックスが上手い。要はそこだろ？ んじゃ、オレ様の出番ってとこだ」

「……………」

こここのところの悲惨な結果を振り返れば、耳の痛い指摘だった。確かに欲張りすぎなのかもしれない。たかが、気持ち良くなりたいたってだけのことに。

「で、今夜はまた特別だ。とっておきのヤクが手に入ったんだよ。一錠飲めば、ハイになること間違いなし。いきまくりの泣きまくり、男だつて潮噴きまくりで即行トリップできるって話だぞ。まだH L P Dも勘づいてねえ、できたてはやはやの合法ドラッグさ。なあ、どうだ？ 使ってみたくねえか？」

「……………」

潮噴きまくり、というくだりでごくと喉が鳴った。正直全然気に入らない相手だが、知らないやつでもなし。ほかが全部及第点以下だとしても、そのクスリさえ効いてくれたら。あの夜みたいに、もう一度――。

「悪いが」

「条件ぴったりの男が、ここにいるんでね」

「……………?!? おわあっ！」

わざとらしく区切られた、色気たつぷりのテノール。

背後から突然声をかけたステイブンは、白いジャケットの襟首を掴んでザップを椅子から引きずり下ろしていた。絶対零度の眼光はあまりにも鋭く、射殺さんばかりの圧力でもって観衆を睨みつけている。

「何か文句でも？」

「……………ありません……………」

顔はいい。身なりも、センスもいい。おまけにナニがでかそ

うで、セックスが上手そうでもある。しかしそんな甘い顔立ちの伊達男がギャングもびっくりの異様な凄み方をしてみせたので、髭面スキンヘッド含め、店内のほぼ全員が瞬時に辣み上がっていた。思わず、返事が敬語になってしまいうほどだ。

「釣りは要らないから」

高級ブランドのスーツを嫌味なく着こなしたいわくありげな男は、多すぎるほどの紙幣をカウンターに残し、すっかりフリーズしたザップをずるずる引きずりながら店を出ていった。騒動の種は見えなくなったものの、あの男はいつたい何者なのか、という話題で、バーはしばらくもちきりだった。

\*\*\*\*\*

「……………つと、待……………つ！　スターフェイズさん！　俺歩ける！　歩けますってば！」

飲み屋の連なる細い路地で、ずるずる襟首を引っ張られて進む。ゲイバーで男ひっかけようとしてたら職場の上司にバレて引きずり出された、なんて怪談よりも恐ろしい状況なのだが、とりあえずこの乱暴極まりない移動手段が喫緊の課題だった。

ずんずん無視して進まれて、いよいよ本格的に暴れてやろうかと思ったところでぱつと首を解放される。袋小路だ。唯一の進路を、怒りのオーラをしょったステイブンプンが塞いでいる。「……………な、なんなんすかあ、もう……………つ！　せつかくいいところだったのに……………！」

「……………どうもこうもあるかつ！」

切れかけの電灯がなんとか照らしているだけの暗い夜道に、怒声がびりびり響き渡った。

「お前な！　噂になってんだよ！　銀髪褐色の美味そうなネコが、いい棒探して毎晩うろついてるって！　ちよつと顔が良けりや誰でもヤれるぞつて、写真付きで出回ってんだ！　見ろよこれ！　馴染みの情報屋からこれについて質問されたとき、俺の気持ちがお前に分かるか!?!」

「うえつ……………!?!」

ステイブンプンが差し出したスマホには、隠し撮りしたのであるらうザップの横顔と、それに対するたぐさんの書き込みが映し出されていた。夜遊び好きの人間たちが集う掲示板らしく、「どここのホテルでやってやった」だの、「乳首がやたら感度高かった」だの内容にまったく遠慮がない。

一回きりでフラれてしまった腹いせなのか、「こいつマジ尻

軽！ 即ハメだったぜ」とのコメントと一緒にセックスの最中に盗撮したのである。白黒の画像を貼り付けている者までいる始末だった。ドアップになったザップのイキ顔へ、「永久保存したった」とか「これで每晚抜いてる」とか、「俺もイケメンだったらこいつのケツ穴壊れるまでガン掘りしてやっただの」などと、ひどい言葉が何百何千と並んでいる。どれもこれも、正面きって言われたなら決して生かして帰さないレベルの台詞だ。匿名での交流にいつさい興味のないザップは、まさか自分の行動によってこんな事態が起こっているとは露ほども認識できていなかった。

「~~~~~っな……!? これ俺!? すね、うわあハメ撮りとか、マジか……。つちくしよ、コイツ見つけてぜってーブツ殺してやる……!! ああそんで、その、これは、まあ……。その、こういうことになっちまったのは確かに俺が悪かったすけど! でも俺の評判なんでもととこんなもんでしょ!? このせいでなんか具体的にライブラに迷惑かけてます?! いい加減ガキじゃねえんで、俺のこたあもうほっといてくれませんかね! ……だって、あんたには関係ないでしょう!」

実際にはステイブンがきつかけだったのだから全然関係なくなんてないのだが、口を突いたのはそんな台詞だった。あくまで不幸な偶然でこうなってしまっただけであんたを責める気はないのだと、そういう気持ちから出たフレーズだったの

だけれども。その何倍もの大きな声で、ステイブンは怒鳴り返してきた。

「俺に関係ないだつて!」

——殴られる!

物凄いスピードで伸ばされた腕に、ザップは思わず身構える。強烈な打撃が来ると予想しての反応だったが、激しい痛みに襲われることはなかった。その代わり、唇に柔らかい感触がする。痛めつけられると思つたのに、ザップは両方の手首を取られ、壁に押しつけられて口付けられていたのだつた。なりふり構わず、といった感じの、性急なキス。スマートさのかけらもないそれに、ぞくぞくぞく……っ♡と官能が呼び起こされる。

「……ふ、は……♡」

「もういっぺん言ってみろ、この節穴め……!」

唇が離れる。けれど、ザップは動けない。背後の壁を利用して、ステイブンの両手の檻に閉じ込められているからだ。

「顔が良くて？ 身なりが良くて、センスが良くて、おまけにナニがでかくてセックスが上手い奴がいんだって……!!? いるだろ!?! いるじゃないか、ここに！ 頭だけじゃなくて、お前は目も悪かったのか!?! どうして僕じゃ駄目なんだ！ あのちんけな店に、僕以上の男がいたい何人いるって言うんだよ!! 答えろ、ザップ！ どうして、どうして僕じゃ駄目なんだ……!! お前はちつとも、こつちの思うように動いてくれないで……つ！ くそつ、お前はいつもそうだ！ いつもそうやって、僕を、僕を……!!」

「……は？」

間近でぶつけられる言葉の内容にもびっくりしたが、最終的にはステイブンの声が震え、おまけにぼろつと涙をひとつぶ零したのでさらに仰天してしまった。職場の上司、秘密結社の裏も表も仕切る、腹に一物抱えてそうな副官。彼についてはそれくらいのことしかザップは分かっていたのだけれども、このところといえは酔った勢いで抱かれてしまったし、ゲイバーで男漁りをしているところをとつ掴まるし、なにもかもが理解の範疇を越えている。

「や、ちよつと、なんなんすかね？ な、なんつーかそれ……!!」  
完全にキヤパ越えの脳味噌で、ザップは無意識に口を開いていた。なにも考えていない、なにも考えられていないがゆえに、

今一番疑問に思っていることが自然と音になっていく。なにせ、なにか深刻そうな雰囲気は十分伝わっていたのだが、話の前半のインパクトがありすぎて、ほとんど頭に入って来ていなかった。

「……イヤ、あんたそれ、マジで自分で言っちゃうんです……!!? 顔と身なりとセンスが良くて、ナニがでかくてテクニシヤンって本気で……? そりや事実かもしれないですけど確かにそうかもしれないですけど、いつくらなんでも自分に自信ありすぎじゃないですか……つ!?!」

「ああ？」

面食らったステイブンが、涙の滲む瞳をまんまるに見開く。どこか遠くで野良犬が、アオーンと遠吠えするのがうつすら聞こえた。

\*\*\*

「いやー、あんときはもう、思わずツッコまずにはいられんかったんですよね〜」

「お前その話、何回すれば気が済むんだよ……」

高価な家具が行儀よく並んだ広いリビングで、ザップとステイブンはソファに腰掛け、就寝前のひとときを過ごしていた。仲良くびったり身体を寄せて、手にしたビールで気持ち良く喉を潤す。

ほんのり顔が火照るくらいには酔っばらっているけれども、ふたりの周りの空気は非常にリラックスしたものだ。ひとけのない路地で言い合いをしたあの夜にاندかんだで付き合ってみるようになったので、流れからいえばまあ当然のことなのかもしれない。ザップとステイブンは、お試し期間中とはいえ、恋人同士になったのだから。

「ふふ。それで、こんなイイ男なのになんで僕じゃダメなんだ〜ってテンパって泣いてみせたあとの、あんたのダダのこね方がもうねえ……!」

「恥ずかしいから勘弁してくれよ!」

わっと大げさに叫んで、ステイブンが赤い顔を手で覆う。あのとときのやりとりを、ザップは改めて思い起こした。

『……イヤ、あんたそれ、マジで自分で言っちゃうんです……!? 顔と身なりとセンスが良くて、ナニがでかくてテクニシ

ヤンって本気で……? そりゃ事実かもしれないですけど確かにそうかもしれないですけど、いつくらなんでも自分に自信ありすぎじゃないですか……っ?!?!』

『ああ?』

ステイブンは一瞬ぼかんとしたが、すぐにぎゅっと唇を引く。

『……俺にはそう見えてたし、人からもそう言われるから、間違っていないと思ってただけど……でも違うのか? お前にとって僕は、何の魅力もない人間だったのか?』

『あつ、いや、そういうわけじゃないんですけど……』

『だとしても、だ』

潤んだふたつのガーネットが、ザップを見据える。『それでも僕は、願わずにはいられない。適当な奴に身体を任せるなんて、金輪際やめてくれ。どうしてもと言うのなら……、どうか、僕を、使ってくれ。お前がその辺のどうでもいい輩にいいようにされてしまうなんて、僕には耐えられないことなんだ。都合のいい道具だと、単なる棒だと思ってくれていい。予定も全部合わせるよ、お前が満足出来るように精一杯やる。忙しかろうがなんだろうがいつでも欲しいだけ気持ち良くさせてやるから、だから、お願いだ。もうこんなことは止めてくれ。後生だ、頼むよ、なあザップ……!』

『え? あ? え……?』

話が飛躍し過ぎて、まったくついていけない。ステイブンを使う？ 都合のいい道具にする？ あの冷血な鬼上司が、必死になってザップに譲歩を求めている、ような感じがした。だんだん頭を垂れてしまったので今や彼の頭頂部しか見えず、表情からヒントを得ることすらできない。そんなに一生懸命になって、なにを求めているのか？ ザップにはまるで分かんなかったが、すぐに答えは明らかになった。

『……僕は、お前が好きなんだ。ずっとずっと、好きだった——』

『エッ』

今度は、ザップがぼかんとする番だった。

誰が、誰を、好きだった？ 彼の日頃の態度を思えば、今の発言はなにかしらの間違いにしか聞こえない。ただ直近の、なんでもするから自分を使え、ほかのやつのもものになんてならなくてくれ、という懇願に結びつけるとしたら、なるほどそうかと合点がいった。あんたは俺が好き。俺は気持ちいいのが好き。あんたは俺を気持ち良くさせんのがうまい。ってことは、俺はあんたと一緒にいたら、いつだって超気持ち良くなれるってワケ？

『……っし！ んじゃいっぺん、お付き合いしてみます!?!』

信じられない、という顔をしたステイブンを見下ろして、ザップはふふんと鼻を鳴らす。ここ一番の思いきりの良さは、扱う技の切れ味のごとし。銀灰の瞳に爛々と意気がみなぎっているのを見てとって、伊達男はようやく呼吸の仕方を思い出したかのように、ほう、と静かに息を吐いた。

『………名前』

『ん?』

『呼び方、変えてくれないか。ファミリーネームじゃなくて、下で……』

『ああ……。いっすよ、』

なんだかくすぐつたい気分になって、ザップはちよつと笑ってしまった。はにかんで、視線を合わせる。そうして、彼の名を呼んだ。

『……これからヨロシクお願いします！ ステイブン、さん！』

『……っし!』

感極まって口付けてきたステイブンを受け止め、その頬が新しい涙で濡れているのに気付いて、ザップは喉の奥でまた笑う。

(……なにこれ、このひとちよー俺のこと好きじゃん……!?)  
 こんな見た目で、アホみたいに強くて、頭良くて仕事できて、  
 あんなけエグイセックスできて、それなのに、それなのに、)

——このひと、実はめっちゃくちゃ可愛いんじゃないかね!?

一度思ってしまったら、あつという間に虜になっていた。あれだけ何人も試してしつくりこなかったのが嘘のように、急に納得できてしまった理由がさっぱり分からなかったけれど。ザップにとつてそれは、割とどうでもいいことの範疇だった。

だって、これからはきつとこのひとに気持ち良くしてもらえ  
 る。もう、夜な夜な男を探して出歩いたりしないでいい。ハズレを引いて、徒労感がつくりしたままとほとぼり帰宅なんてしなくてもいいのだ。気分はハッピー。超ハッピー。正体不明のヤクなんかなくても、今この瞬間からアゲアゲだ。

単純な作りの脳味噌に生まれて良かったアと頬を緩めながら、ステイブンの熱い接吻にとことんまで応えてやる。もう二度と離すものか、ときつく抱き締められているのだが、こっちだつてあんたみたいな上物逃がしやしませんよ、とザップは思っていたのだった。

「あー恥ずかしい……。僕すっごい格好悪い……」

「まあね。カッコ悪いって言やあ、あんた初めてヤっちゃった日の朝のこと覚えてます？ 被害者である俺をほっぽって、ひとり勝手に落ち込んだやつ。あれもさうとうカッコ悪かったっすよね」

「おい、フォローはゼロか!? ゼロなのか!?!」

シヨックを受けている様子のステイブンを、ザップはしれつと聞き流す。切り替えは早いほうなはずだが、とはいえ結構傷ついてたんだななどと、他人事のように思った。

「……悪かったよ。女好きのお前相手に可能性とか微塵も感じてなかったから、この気持ちは墓まで持っていくつもりだったんだ。なに酔っぱらってうっかり手を出しちゃうなんて信じられなかったし、こんなことになつたらいいよお前に嫌われるのは確定事項だろうなって……。ひよつとしたらライブラもやめちまうかも、戦力的にももちろん困るが、もしかしたらもう二度と会えないのかもしれないって思ったら、身動きとれなくなつてたんだよ」

「……すぐ謝るぐらいしたらいいじゃないですか。許してもらえるかもしれないし」

「だから、それが出来ないくらい参つてたんだよ。バグつてたんだ」

「バグねえー……?」

感覚主体で動いているザップには、ステイブンの話はそこ

そこ意味不明だった。考えすぎて変になるくらいだったら考えなきやいいじゃねえかと思ってしまうあたり、そもそも根本的な部分が理解できていない。わけわかんねえなあ、という感情に引つ張られて、ザップはなんとなく思いついたことを口にした。

「二回目ヤつちやったのも、そのバグすか？ 頭おかしくなつてたつてこと？」

「ああ、それは……」

もももごとステイブンが口ごもる。ザップは視線で、続きを強く促した。

「……それは、バグじゃなくて。迷つてたけど、ちゃんと考えてやった。お前をどうしても諦めきれなくて、ならカラダから落としてやるしかないかなつて」

「はあああああああ……」

至近距離で大声を出されて、ステイブンは手で耳を塞ぐ。だから言いたくなかつたんだ、と愚痴をこぼしてから、しぶしぶ続きを話し始めた。

「どうせ覚えてないんだろうけど、初回からすつごかつたんだぞお前。初めてだったくせに後ろで何度もイって、揺すつてやったら気持ち良さそうに喘いでさ。終いには、『ナカ気持ちいい♡♡♡』なんて言い出すから、僕もたまになくなって直接中に出すだろ。で、お前が大喜びしていきま

くるから、こつちだつて止まなくなるだろ……！ そんなボトム才能ありまくりなお前があんなことがあつたにも関わらずたらふく酒飲んでフラフラしててさ。こんなんじゃ、いづどんな奴に喰われちまうか分かつたもんじゃ……、じゃあやってみるしかないだろうつて思つたんだ」

「……うー……」

今度はザップが口元を押さえる。懲りない性分はいつものことだが、改めて指摘されると結構きつい。

「勝算はあつたんだ。僕の技術のすべてを味わわせてたつぷり可愛がつてやつたら、絶対お前を骨抜きに出来るつて思つた。それが、あんな……。まさか、男漁りに走るだなんて……」

「……はは」

わざとらしく天を仰いでみせるステイブンから、ザップは気まずそうに顔を逸らした。馬鹿なことをしてかした自覚が、まったくないわけじゃない。

「……だつて、あんたがなに考えてるのか全ツ然わかんなかつたんすもん。興味本位でおかしなこと覚え込まされて、おかわりがあるかどうかもわかんねーのに大人しく待つてなんていらんないじゃないすか。これでもねえ、自分でどうにかできる範囲で真面目に努力してたつもりなんです、俺は」

「……お前の堪え性のなさを、甘く見積もつてたか……。それとも、誰彼構わず引っかけようとする貞操観念のなさを読み違

えたか。なんにしても僕の計算ミスだったみたいだな。その時点でではや盛大にバグってたんだろが、自分じゃ気付けないもんなんだなあ、ほんとに」

「ひでー言われよう！ 元はと言えば、あんたがさっさとココつてりや良かったんでしょ!? そこからつすよ、間違いは！」

「馬鹿言え」

ステイブンはむっとして、ザップにぐいっと顔を寄せる。

「まともに告白なんてしてたら、お前秒で断っただろ。男同士なんてあり得ないって思っただろ？ 少なくとも、二回目のセックスが無かったら確実にフラれてたね。断言したっていい」

「ん……………」

言われてみればその通りで、ステイブンがアリだと感じられるようになったのは、セックスが気持ち良かったからだ。強烈なオーガズムこそ、性別の境界線をも超える鍵だったのだ。おおんかカツコイイじゃん、と脳内で画面自賛したところで、なぜだかムラっとその気になった。気分も良くなってきたし、そろそろ頃合いだろう。合図代わりに、ザップはするりとステイブンの手に手を重ねる。

「まあね、過ぎたことはいっすわ。マジ惚れした相手には脳味噌バグっちゃう頭脳派とか、可愛いすぎるってもんですし」

「！」

つつ…………♡と指をなぞる仕草に夜の気配を感じて、ステイ

ブンが息を呑むのが分かる。お試し期間中とはいえ、そういうリアクションをする恋人に対してちょー可愛いな、という感想を抱く程度には、ザップだって惚れ込んでいた。

「やらかした分は、カラダで返してもらいましょ♡ 今日も気持ち良くしてくれるんでしょ？ ね、ダーリン…………♡？」

わざと声をひそめて、耳元で囁く。付き合う前なら、「勿論だよハニー」なんてさりとってのけ、キスで応じるステイブンを想像していたと思う。ただ実際は、どぎまぎと赤面して、無言でぎゅっと手を握り返してくるというのが正解だった。そのくせぎらぎら目の奥を輝かせて、雄っぽくがつついてくるのだからたまらない。ああそんなに俺が欲しいんだなあ、なんだかこそばゆい気持ちにすらさせられる。

だからザップはくふくふ笑って、ステイブンに連れられるまま、二階への階段を上がっていった。寝室のベッドに座らされると、ステイブンは黙ってすぐに部屋を出ていく。おそらくは自室に向かったのだろう。そこで彼がなにをするつもりなのかもほぼ予想がついていたので、ザップはベッドに無防備に転がり、小さく笑いながら愛しいひとの帰りを待っていた。

\*\*\*\*\*

「うわぁー。やーらし♡」

やけに楽しそうに、ザップは言った。寝室に置かれている大きな姿見には、恋人が手渡してきた性的なコスチュームを纏っている、自分自身が映っている。

「あんた、んなスカした顔して……♡ こういう趣味もあつたんすねえ?♡」

ファツションモデルよろしく、鏡の前でザップはあれこれとポーズを決めた。下衆な異国情緒漂う本日の衣装はいわゆるJK風とかいうやつで、ジャパンでは人気があるらしい。ハイテーンの女の子が着るものというだけでも背徳感がすごいのだが、ザップのそれは大人のお愉しみ用で、さらに凄まじいことになっていた。

白いラインの入った紺色の襟が特徴的な上衣は、極端に裾が短い。臍どころか乳首が半分覗いてしまうくらいのもはや着ている意味が分からない代物だった。いかかわしさを出すという文脈でなら、確かにその通りかもしれないが。

襟の下を通り、裸の腹へと、赤いリボンが垂れ下がる。ネクタイの形ならまだしも大きな蝶々結びになっているそれは、よく引き締まった男の腹筋と並ぶと、醸し出す雰囲気の違いが強く

烈だ。

下衣はプリーツタイプのスカートなのだが、これも輪をかけて様子がおかしい。股上股下どちらに対しても寸足らずな印象で、ほとんど陰部が見えるんじゃないかというくらいローライズなのに、下端はようやく股が隠せているだけ、というギリギリのサイズ感だった。裾広がりのラインになっているのでそう見えづらいが、スカートというよりは腰巻程度の役割しか果たしていない。折り目のきっちりしたプリーツが揺れると、ちらちらちら内股や尻が見えてしまう。

いかにも淫猥な格好を満足げに眺めると、ザップはにやにや笑いを浮かべつつ、ベッドに寝そべっていたステイブンに向き直った。

「できましたよ〜」

「……………はは。すごいな、これ……………♡」

「ぶはっ!! ちょっとステイブンさん、その顔!」

落ち着きなくベッドから起き上がり、でれっというかへっというか、その整った顔立ちをだらしなくさせた恋人の表情に、ザップは思わず吹き出してしまった。

「……………自分で選んで、買って、持ってきたくせに!」

「だって似合ってるから……………なんでも着れるんだなお前」

「似合ってるつつうか……………。変態っばいっしょ」

「馬鹿、それがいいんだ」

頭のとっぺんから、裸足のつま先まで。視線を何度も往復させ、側面に回ってうんうん頷いたりして、ステイブンはザップの女装を愉しんでいる。ザップは得意顔で、近距離での鑑賞会に根気よく付き合っていた。最初こそ照れくさかったりしたのだが、今となってはもう慣れっこになっている。

「はー、いい。ノリのいい恋人って最高だな」

「そりやどうも。お役に立てたんなら良かったすわ」

こんな服を着ていても、男っぽい雑な口調は変わらない。当たり前だが立姿もどう見たって立派な男子で、その彼がこういう服装をしているというギャップが妙な色気に繋がっていた。ステイブンはベッドに腰掛け直し、こくんと喉を鳴らしてかひとを見上げる。

「ねえ、下も見せてよ。自分でめくって？」

「もおー。ステイブンさんのエッチ……♡」

言葉だけ非難する風で、ちっともそんな顔はしていない。ザップは頬を赤らめ、にやあ、と口角を緩ませながら、ゆつくりとスカートの裾を持ち上げていった。

「あああああ……♡」

声を漏らしたのは、ステイブンの方だ。淫靡な幕がするする上がって、秘められていた場所が露になっていた。ザップは

いつものボクサーパンツではなくて、下着まで女性用のものを履いていた。もちろんそれもステイブンが用意したのでこうなることは分かっていたのだけれど、だからといって実際にすると単なる想像とではインパクトが比較にならない。レースやらフリルやら小さなリボンまでついた薄いピンクの布切れ、その下に押し込められた男性器が窮屈そうに、もっこりと生地を膨らませているさまがいやらしい。

「こんなちっこいパンツにナニ入れるの、大変だったんすからね？♡俺ちゃんの、ビッグマグナムう……、ん、んっ♡」  
「……あはは、はは……♡ そうだろうねえ、こんな暴れん坊じゃあねえ……っ！♡」

まだ、触れてもいないのに。間近で見られているだけで、自分でスカートをめくって見せつけているだけで、ザップのペニスが勃起していくのがよく分かった。ぐぐ、と下着を歪ませて、じわじわ TENT を張っていく。ステイブンが面白がってさらに顔を寄せると、とうとう薄桃色の布地がびんと張った。

「すごい……♡ えっちな、ザップ♡ 僕に見られて興奮しちゃったんだねえ？♡」

「んあああ、あ……！♡ か、嗅がないで♡ そこ匂い嗅がないでえ……♡ ふあ、あ♡」

つるりとした布に鼻を当て、ステイブンが息を荒くする。嫌がっているような言い回しで、張り詰めた下着の頂には、じ

んわり染みが広がっていた。

「おツユが出るよ……♡ お股嗅がれてとろとろおツユが出ちゃってるよお前♡ ほんつとになんていうかもう、……やらしい……!♡」

「んんん、あつ♡ 言わない、でえ♡ おツユ出ちゃうううううううう……っ♡」

ヤリチン屑ヒモチンピラ野郎、の面影はもはやまったくない。お試し付き合いもそろそろ二か月が経とうかというところで、セックスの回数を重ねることに、どうも方向性がねじくれてしまったのだった。ザップが昂るポイントというのをステイブンは僅かも見逃さず、最初は視線で、次は淫らな言葉で、そのうえ卑猥なコスプレをさせて、と、プレイをどんどんエスカレートさせていき、今やそこらのポルノ・ムービーにだって引けをとらない有様である。

その辺はザップにだつて分かつちやいたのだが、キモチイイのにはどうにも勝てない。現にスカートは持ち上げられたままで、その頂上へ我慢汁の染みを作っている女物の下着を、これ見よがしに見せつけているのだ。

「すけべだなあ♡ んじや、いただきまーす……♡」

「ひゅんっ♡」

びいん、と部分的に張ったことで空いてしまった下着の隙間から、ステイブンの舌を差し入れる。どうにか先端だけ布に

収まって、ほぼほぼ剥き出しになっている竿の側面を、ねつとりと味わうように舐め上げていった。

「はあ、あつ♡ あう、あ、やば、やばあ……っ♡」

「ふふ……♡」

根元から裏筋へ、ねろねろ舐め回されるとザップの腰がにわかにはびくついた。まっすぐ立っていた膝が軽く折れ、屈伸の途中のような、不自然な体勢になる。両手だつて震えているのに、ザップはスカートの端を持ち上げたまま、ステイブンの愛撫を受け続けていた。

「イ……く、いつちやうっ♡ ステイブンさ、もう俺……!♡」

♡ んあ、あつ!?♡ あああああつ、ばつくんしちやだめえっ!♡ 出るっ出るっ出るっ出るっ!♡ ザーメン出っ、♡ んんんんんっ、んんんんん……っ!♡

「ふは……♡」

かぶんっ!♡とパンティ越しに亀頭を銜えられたのが決定打だった。言葉通りザップの尿道口から、びゅく!♡びゅるるるるるっ!♡と、精液が勢いよく迸る。布一枚に隔てられていたとて、青臭い匂いがステイブンの唾内に広がった。

「いつちやったな♡ 下着、汚しちゃったね……♡」

「んんう♡ だつてあんたが、あんんんん……っ!♡」

「はあはあ息を乱すザップの耳元に口付けて、すぐさまステイ  
ーブンは次の一手に移行した。いやらしく口角の片側だけを引  
き上げて、上衣の裾から覗く、薄ピンクの乳輪に舌を這わせる。  
乳頭には触れずに、わざとらしくくるうりと輪を描く。

「んあああああ……っ♡」

「つんつてなっちゃって、かーわいい……っ♡」

手を使わずに舌だけで刺激するので、ただの前戯にしてはア  
ブノーマルな感が強い。開発され尽くして敏感になった尖りを  
あつさり放置して、今度は逆側の乳輪を舐め、しゃぶり、熱い  
息を吐きかける。

「んんんんん……っ♡」

ザップは身悶えているのに、力の入らない手で一生懸命にな  
ってスカートをめくっている。それが主からの大切な命令であ  
るかのように、どんなに理不尽な使命でもまっとうしようとする  
、哀れな奴隷であるかのように。

そしてそこになんともいえない悦が伴っていることは、再び  
雄々しく勃ち上がった彼のペニスがはつきり示していた。カウ  
パーと精液とでぐつちより湿った異性用の下着を、張り詰めた  
陰茎が目一杯持ち上げている。

「またこんなにおつきさせちゃって♡ はしたない子はお仕  
置きだな♡ もっぺんいけよ、ザップ！♡」

「ふあつ！♡ あつ、あ！♡ そんなつ、急にいいいいいい

……っ♡」

パンティの上からぎゅつと竿を握って、ステイーブンが手を  
スライドさせた。淫らな体液でぐちよぐちよになったそこは即  
席のオナホールとなり、ダイレクトな快感がザップを襲う。焦  
らされてばかりですっかり準備万端だった身体は、途端に体温  
を跳ね上げた。

「あつ！♡ あつ！♡ あつ！♡ あつ！♡ いやあつ♡  
ちんちんつ、ちんちんがあああああ……っ！♡」

「やらしいおちんちんだな、ビックビクしちやattering♡  
これじゃあ即イキ間違いなしだな♡ 女性用の下着でシコシ  
コシコシ♡ えっちな汁が染み染みぬるのおパンツで  
シコシコシコ……♡ どうぞ見てー♡ つて自分でスカート  
めくつちやatteringもんな♡ こんなんで嫌あ♡ つて言われ  
ても説得力ゼロだよなあ！♡ ザップはちんちんシコシコが  
好きなんだもん♡ 彼ピのおててでおツユぐじよぐじよパ  
ンツ越しにぬるぬるシコシコしてもらおうのたまんないよなあ  
♡ すっかり変態……、だねえ♡ 女装シコシコ♡ えっちな  
なセーラー服着てふりふりピンクの可愛いパンティでおちん  
ちんシコシコしてもらってフル勃起なんだもんね♡ あーい  
くな、もうこれいくでしよ……♡ このおちんちんのふるふる  
るは♡ イっちゃうときのふるふるだもんね♡ お前の性  
癖も、おちんちんのクセも……♡ みいんな僕にはバレちゃ

ってるから♡ だから安心して、すけべなとこ曝していきな  
 さいね？♡ ね、ザップ♡ いつもみたいに、えっちなこと  
 叫んで気持ち良くなりながらザーメンびゆるびゆるしてい  
 んだよ♡ ほらもう持たないんだろう♡ ザーメン♡ 出  
 そうよお♡ ねっとり濃厚ーいの……♡ 出して、ザップ！  
 ♡ 女装シヨシヨザーメン♡ 自分でスカートぺろーんし  
 ながらオナホパンティにどびゅどびゅザーメン♡ 自分のお  
 ツユでほどよくぬめった自家製オナホパンツにお漏らし射精  
 ……♡ もう大人なのにパンツ汚しちゃう駄目さ加減にア  
 ヘアへしながら白いのびゅっびゅしよ♡ ザーツプ、ザーメ  
 ン♡ 僕が見てる前でお漏らしして♡ お・漏・ら・し♡ 女  
 装シヨシヨミルクをどびゅどびゅ♡♡♡つて恥ずかしお漏らし  
 ♡ 女装シヨシヨがだあいすきな証のお漏らしザーメン♡  
 いっぱい出そ？♡ どびゅどびゅしよ♡ 女装シヨシヨだ  
 いちゅきザーメン……♡ 女おパンツにびゅっびゅだよ♡  
 びゅ♡ びゅびゅ♡ びゅくるるるー……♡♡♡つて  
 ♡ ほらイこ♡ イこイこ♡ ちーんちゃん♡ 女装シヨシ  
 コおちーんちゃん♡ どびゅどびゅしちやえよ、イっちゃい  
 なよお♡ ほらほらちんちん気持ちいいね、気持ちいい……  
 つ！♡ 自分のおツユで濡らした手作りのぐちよぐちよオナ  
 ホおばんちゅで♡ イきなよザップ、すけべ汁発射して♡  
 自主的にスカートぺろーんつてしてる言い訳出来ない格好で

♡ イけよ♡ イけ♡ おちんちんの先から熱いのびゅく  
 びゅくつてオナホパンツに出さない……♡つ！♡」  
 「あひい♡ はひ、あ、あつ！♡ やああ、やらし、やらし  
 い……♡つ！♡ お、漏らし♡ お漏らし、しちやっ♡ 女パ  
 ンツにいいいいいいいい……♡つ！♡ 女装シヨシ  
 コ気持ちいい証拠の濃厚ういおツユっ！♡ 白いのっ、漏れ  
 ちゃうっ！♡ 我慢できないっ！♡ お漏らし我慢できな  
 いいいいい……♡つ！♡ 漏れるっ♡ お漏らしっ♡  
 漏れちゃうっ！♡ 漏れますっ！♡ 女装シヨシヨで発  
 情ザーメンどっびゅん♡♡♡つて！♡ 出るっ♡ 出るっ♡  
 漏れちゃうううっ！♡ 女装シヨシヨだいちゅきちゅつきの  
 変態ミルクがつ！♡ 漏れっ、漏れりゅ、漏れひや、……！！♡  
 あっ、あ、あああああああ……♡つ！♡ んひい、  
 ー……♡つ！♡ んひい、  
 ひっ♡ ひいひいひいひいんんんん……♡つ！♡」  
 「おおお♡ 大量、大量……♡ いっぱいびゅっびゅだね  
 ザップ♡ 変態♡ このド変態……♡つ！♡」  
 「あっ、あん……♡ んっ、んんん……♡つ！♡」  
 細腰を跳ねさせて、ザップが下着に射精する。ただでさえカ  
 ウパーでぐっしよりだったのに二発目の精液まで加わって、ピ  
 ンクのパンティはぐちやぐちやのどろどろになつてしまつて  
 いた。

性器をしごく手を離れたステイブんに煽られて、ザップは怒るところか、唇を噛んで快感をこらえている。自らスカートをめくり股間を見せつけているにも関わらず恥ずかしそうに顔を背けているザップの様子は、ひどくちぐはぐであったし、異様に扇情的でもあった。

「はあーい気持ち良かったな……♡　じゃあ、見せてよ♡　お前がどれだけたくさんイったか、僕に分かるようによおく見せて……♡」

「~~~~~♡　う…………♡」  
吐精の余韻にとろけた銀灰の瞳が、ステイブンを横目に捉えた。拒絶するでもなく、はしやぐでもなく、ザップはただただ恥じ入りながら、恋人の要望に応じていく。

曖昧な指示にも身体が動くのは、何度もこの味を覚えさせられたからだだった。彼の命令がなにを意味していて、それに従うとどんなに気持ちいいのか、ザップはすっかり仕込まれてしまっていた。

「あ、あ…………♡　イっちゃい、ましたあ…………♡　ザップは、こんなに…………♡　出し、ちやい、まし…………♡　た♡　チェック、してえ♡　ザップの、おパンツう…………♡　射精したてのっ、ひらひら女パンツうううう…………♡　っ！♡　チェックして、くら、さい♡　可愛いおぱんちゅにべっどりのっ、ザップの出したてすけべミルク♡　ねばこい大量の、変態汁っ♡　お

近くで、ご覧くだ、さあい…………♡　もつともつと寄って近くで見えっ！♡　匂い嗅いで…………っ！♡　ラブリーなピンクのおパンティ汚しちゃったザップのっ、特濃お漏らしすけべ汁うううっ！♡　くんくんしてえくんくんしてええ♡　ステイブンさん、ステイブンさあああああん…………っ！♡」  
「…………このすけべ♡　パンティに出したザーメン嗅げとか♡　まるつきり変態野郎だなお前はほんとに…………っ！♡」  
「ふえううううう…………っ♡」

ザップは震える手でパンティを脱いで、あろうことかぐるりと裏返し、内側の面を一杯広げてステイブンの眼前へ構えていた。ザップの股間を覆っていた部分は諸々の体液が染み渡り、生地の色をあらさまに濃くしてしまっている。粘度の高い精液だけは染みみらずに付着し、薄い布地に乗つかるようになっていたので、ステイブンはその高めの鼻をぎりぎりまで寄せて、わざとらしく匂いを嗅いだ。

「ああ臭う、臭うなあ…………♡　発情した女装大好きっ子のいやらしい匂いがするよ…………♡　興奮してたんだな？♡　こんなにぶるっぶるんの、いやらしいミルクがどびゅどびゅちやうくらいにさあ…………♡　あー濃い、濃いよこのザー汁♡　見てごらんザップほら、ねっばねっば♡　どろんどろんだ、このおツユ♡　えっちな出たねえ♡　よっぽどお漏らし気持ち良かったんだね…………♡　ほらあ見てごらん、こんなに濃

くって、とろんとろん……♡ ねばこい糸引き♡ こつく  
り濃い味しそうだねえ♡ いい値段で売れちゃいそうな、た  
っぷり糸引きミルクだねえええ……♡！♡」

「ああああああああ♡ あ、あ、やらしひ……♡ つ♡  
意地悪言われ……♡ つ♡ 出したばつかのザーメンぐちゅぐち  
ゅ観察されながらひどいこと、言われ……♡！♡ あう、あう  
♡ これ、恥ずかしい……♡！♡ すご、めちやくちや、恥  
ずかしいよおおおお……♡！♡」

ザップが広げた股部分の生地の上で、ステイブンはぶるり  
とした白濁を弄び始めた。ねちよねちよぐちよぐちよ掻きませ  
てから指先を持ち上げると、ねろん……♡と濃度の高い体液  
が糸を引く。ゆっくり不自然なまでに時間をかけて、ステイ  
ブンはザップの精液で戯れた。

「んー、卑猥だねえ……♡ 汚れちゃった女パンティの上で  
出したてほやほやとろとおツユの粘度確かめてあげるのす  
つごくすけべでやらしいね♡ ほら、舐めて♡ 僕の手汚れ  
ちゃった、お前の変態汁のせいで……♡ キレイキレイにし  
てよ♡ 犬みたいに舐めなさい♡ 自分のすけべをお詫び  
しながらわんこみたいにぺろぺろ舐めて……♡？♡ ほら、ほ  
ら、ほら♡ だってお前がいやらしくて淫乱で、こんな面白い  
もの出しちゃうから悪いんでしよう……♡？♡」

「んむううううう……♡ つ♡ め、ごめんなき……♡ つ♡

俺、おれ、すけべでええええええ……♡ つ♡ ステイブ  
んさんの指つ♡ 汚しちゃったのお……♡ つ♡ ごめんなき♡  
濃い汁出してえ、ごめんなき……♡！♡ つわ、わんこみた  
いに、ぺろぺろするから……♡ 許して♡ 許してえええ  
え……♡ つ♡ ぺろぺろしますねえ、ほらぺろぺろお♡ ぺろ  
ぺろおおおおおお……♡！♡」

差し出された指を、膝立ちになったザップが必死に舐める。  
指先から根元まで舌を這わせて、丁寧に奉仕する。ステイブ  
ンが勝手に始めたことだったの的外れな謝罪を連ねて、ずい  
と突き出された二本の指に、ザップはぱっくりしゃぶりついた。  
下品な形に口元を歪め、祭りの面のひよつとこのようになり  
ながら、上目遣いに主人を見つめる。その間も、唇と唾内と舌  
とで吸いついて、ちゅう♡ちゅう♡ぢゅっ♡ぢゅ♡と愛撫  
するのを忘れない。

「はは、みーつともない顔♡ ひよつとこフェラしても可  
愛いなんてお前♡ 反則だよなあ！♡ おいすけべ♡ 僕  
のペニスのこと考えながらしゃぶってんのか？♡ お前の大  
好きな太くてかったいのこと想像しながらしゃぶしゃぶご  
奉仕してんだろ♡ すっかり雌の顔しちやって♡ ちんぽ  
♡ちんぽお♡って思ってるの、顔に出ちやってるぞド淫乱♡  
なにが夜の帝王だよブサ可愛いおフェラ顔曝しちやってさあ  
♡ 一生懸命吸いついちゃってお前はほんとにいやらしいち

んぼ狂いだよ♡ ちんぼ狂いちやーん♡ おちんぼだいちゆきちゃん♡ おちんぼ舐め舐め想像して、ハメハメされるの期待しちゃうんだよな元ヤリチンボーイちゃん!♡ 今じや立派なビッチだなあ♡ あは、またそんなおっ勃てて……♡ ほんっと変態だよなお前ってさ……♡ すっごいカッコでフェラ顔に意地悪言われて♡ そんなで感じて、ペニスおつきくさせちややってるんだからさあ……っ!♡

「んふうううううううう、うううううう……っ!♡」

ステイブンの指摘通りで、ザップは再度勃起してしまっていた。下着の布地を広げるために両手が塞がっているもの、戻り返った陰茎が勝手に、するするスカートをめくり上げていく。清楚なブリーツの隙間から先端が顔を出していたかと思えばとうとうによりと、竿全体を露出してしまった。

「あーあ、フル勃起しちゃったか♡ スカートのお股からお前の立派なおちんちんがよつきり生えちやってるのえっちだね♡ じゃあ今度はお掃除こつちなな?♡ パンツも綺麗に舐めなさい♡ 自分が出したものなんだから、しつかり舐めて片付けなさい……♡」

「ひあう……♡」

ちゅぼん♡、とわざと音を立て、ステイブンがザップの口から指を抜く。続く命令を耳にしたザップは恥ずかしそうな切なそうな、それでいて気持ち良さそうな表情で目を細めた。そ

ろそると舌を伸ばし、薄桃色のパンティの生地へと、ゆっくり顔を近づけていく。

「……っん、♡」

「全部舐めるんだよ♡ それ全部舐めて綺麗にするんだ♡ どんな味がするか感想言いながら舐めて♡ ザップ、お前のザーメンどんなお味がするの?♡ こつち見て、ほら♡ 自分のザーメンレビューして♡ 女パンツにぴゅっぴゅしたばつかの新鮮ミルク♡ 美味しいのかな?♡ どうかなあ♡ すけべなお汁の品評会だよ♡ さあさあ聞かせて♡ 自家製おばんちゅオナホで女装イキしたザップ・レンフロちゃんの、今日のおツユはどんな味かな……っ?♡」

「んんんん、ん……っ!♡」

掲げた下着を俯いて舐めれば、少しは視線を避けることができるのに。ザップはそうせず息を弾ませ、あえてステイブンを見上げていた。ちろりと差し出した舌に精液を乗せ、少しづつ飲みこんでいく。頬を染め、溶けきった声で、馬鹿馬鹿しい命令を忠実にこなしていく。

「あ、あう、濃ゆい、ですううう……♡ すっごく濃いいいいいいいい……っ♡ 俺、の、お漏らし♡ お漏らしザーメン♡ 興奮してたからっ、こつくり特濃で出ちゃいましたああああ……♡ 女装シコシコだいちゅき汁♡ 舐めてるとこお、パンツ舐めさせられてるとこ、見られ

ちやつてえ……っ！♡ んっ、ん！♡ きも、気持ちいい♡  
 これえ、やらしくつて♡ きもち……っ！♡ おパンツっ！  
 ♡ 舐めさせられてるのおおおおおお……っ！♡  
 カウパー染み染みのオナホばんちゅっ♡ ぺろぺろさせられ  
 てえ……っ！♡ あう、あう！♡ すごいえっち、えっちな  
 気分になっちゃ……っ♡ んう、んん♡ んんんん、んー  
 ー……っ！♡

遠慮がちにぺろぺろ舐めていた動きはだんだん大胆になっ  
 ていく。露骨な仕草で舐め上げたり、終いには生地にしゃぶり  
 ついて、ちゅーっ♡と音を立てて吸いつくまになっ  
 いた。

「あっははははは！♡ オナホおばんちゅ美味しいか？  
 ♡ そんなにおばんちゅ好きなら、そのまま可愛がつてやる  
 よ♡ こっちおいで、それ口に入れたまんまこっちに來な  
 さい変態ちゃん……っ！♡」

「んううう……っ♡」  
 ステイブンはベッドに寝転んで、下着を銜えたザップを自  
 分の顔の上へと導いた。背面顔面騎乗の体位をとって、無防備  
 な肛門に舌で触れる。

「んううう……っ♡」  
 「あはあ……♡ やーらし♡」

ステイブンはぺろんとスカートの後ろ側をめくつてやっ

て、ひくつく肉穴と戯れ始めた。舌で皺の一本一本をなぞり、  
 窄まりの中央を尖らせた先端でつつく。焦らして焦らして、ザ  
 ップの腰がひとりで揺れ出すのを待つてから唇全体でディ  
 ープキスを交わす。

「んー……っ！♡ んー……っ！♡ んんんんんんん……っ！♡」  
 「ふふ♡」

びくびく身体を震わせて反応するのに、嬌声はくぐもつたま  
 まだ。未だに大人しくパンティを銜えている恋人の、その性癖  
 のこじれ具合の深さを思い、ステイブンは小さく笑った。

「……ふ、う！♡ ひう……んっ！♡ んんんんんんう、  
 んんんんんんんんんんん……っ！♡ ん、ん、い、ふ……！  
 ー……っ！♡」  
 ♡ イふうううううう……っ！♡ んう、ん!?♡」

ステイブンからは見えないものの、ザップは下着を口に食  
 んだまま、とろんと恍惚のまなざしで宙へ視線を彷徨わせてい  
 る。息は乱れて肩が上下し、唇からだらだらと筋になって涎が  
 垂れた。そうして絶頂の予感に全身を緊張させたとき、絶妙な  
 タイミングで、ペニスを掴まれ射精を堰き止められてしまった  
 のだった。紺色のスカートごと思いきり握られた竿が、行き場  
 を求めるみたいにびくん！びくん！♡と大きく脈打つ。

「んふううううううううううう……っ！♡」

くくくっ！♡ ひう、ひ……っ！♡ ひiiiiiiii……っ！♡  
 ♡ にやにこれえ♡ ひどいつ、ひろiiiiiiii……っ！♡  
 「ははっ、可愛い……♡」

絶頂を無理やり止めたくせに、アナルへの愛撫はちつともやまない。ステイブンはそこへ唇を当てたままでザップの乱れつぷりをからかい、すぐさまれろ♡れる♡ちゅば♡ちゅば♡と水音を立てて口づける。

「ひやめ……っ！♡ あひいっ！♡ イ、きはい……っ！♡  
 イか、せ、んんんんううううううう……っ！♡ ひやあ、いや、あ、あ、んあああああ……くく……っ！♡」

「だーめ♡」  
 「そんな、あああ……っ！♡ んふあ、あ……っ！♡」  
 ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡と肛門を吸われ、ぬらつく舌でぬぶん……っ！♡と内部を貫かれる。執拗な責めに変化があるたびに、ザップは顎を反らせて果てそうになる。

尻穴を舐められたしこの短時間に、邪魔さえなければもう何度精を放っていたらうか。けれども、現実には一度もイかせてもらえていなかった。気が狂いそうな熱が、全身で暴れ回っている。

「いやら……っ！♡ イか、せ♡ イかせへえっ！♡ ステ

イブンひゃんっ！♡ イかせへくらはあああああああ……っ！♡ んう、う、うう、うううううう……っ！♡ あっ♡ あ、あ……っ！♡

結果的に自分を苦しめることになる、分らないわけではないのに。渦巻く衝動をこらえきれず、ザップはめちやくちやに腰を振り始めていた。ステイブンの顔面の凹凸に臀部を擦りつけて、自慰によく似た快楽を得る。

それでもイかせてもらえずに、彼の驚鼻の先や、こっちもどうぞと提供された舌べろへアナルを押しつけ、ねだるみたいにピストンをした。唾液にまみれた肛門は、ぴちよ♡びちや♡くちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅん……っ！♡と、いかにもいやらしい音を立てて愚行をいつそう際立たせている。

「ん、はは♡ だーいぶ、出来上がってきたねえ……♡」  
 「んああああ……っ！♡」

陰茎を握っているのと逆の手で、ステイブンがザップの後孔をぐに……♡と開いてみせた。若干の抵抗はあってもそこはとろとろに潤み、桃色の肉を震わせて、明らかに雄を誘っている。

「じゃあ仕上げ、ね♡ こっからは自分で出来るよね？♡」  
 「！♡」

ステイブンはザップを解放すると、立ち上がって想い人を見下ろした。意味ありげな赤銅色の双眸に、ザップはぐくりと

喉を鳴らす。これまで幾度も、こんな夜を過ごしてきたのだから。言葉はなくても、なにが求められているのかよく分かっていた。

「……………、っ……………！♡」

ザップは羞恥に頬を染めて、わななきながらベッドに四つん這いになって伏せる。しっこく銜えていた下着を、ここでようやく口から離した。そうしてステイブーンへと向けていた尻をのろのろ持ち上げていき、最後に自らスカートをペろっつとめくって、排泄のための場所をかのひとへ曝け出す。

「お、ねが……………♡も……………してえ……………っ！♡」

「んー？♡」

屈辱的なポーズで露骨に哀願して、なのに褒美は与えられない。それどころかステイブーンは、にやにや口角を上げてザップの尻を撫でるだけだった。

「僕、そういう風に教えたっけ……………？♡」

「はうん……………っ！♡」

ステイブーンの声の艶が増す。もちろんわざとだ。ザップがそれに弱いと知っていて、狙ってやっているのだった。

ザップの被虐癖をすっかり暴いてくれやがった張本人は、とさおりこうして意地悪をしてくるのだ。お前はこういうのが好

きなんだろ、という態度で、実際それが外れていることなどないから余計にたちが悪い。ここからの悦を思えば、断ることなんて決してできなかった。苛められて、辱められて、それなのに、それだからこそ——、ひどく、ひどく、興奮する。

「お、……………ま……………♡　　くくくくくく、♡　あ、の、おま、……………おっ、……………くくくくくくおまん、こ……………っ♡　えっちなザップに、……………おまんこお……………っ♡　してくださいさあい、ステイブーン、さあん……………っ！♡」

恥ずかしさに全身の毛穴という毛穴が開き、ぶわ、と一気に汗が出る。

自分の発言のおかしさぐらい、本人にもちゃんと分かっていた。ザップは紛れもなく男だ。口にしたのは女性器の俗称で、こんなやり方で動詞代わりに使うものでもない。

けれどステイブーンは、ザップにこうやってねだらせるのを好むらしかった。こんな言い回し愛人にだつてさせたことはないが、機嫌をとらないといつまでだつてイかせてもらえないのは身をもって経験済みだった。だからしょうがない。女みたいな恰好をさせられて、女でも言わないような卑猥なおねだりを

させられて。しようがないで済ませるには悲惨すぎるはずなのだけれど、これで感じてしまう性分なのだと、ザップはもはや自分でも認めてしまっていた。

「なあに？♡ 声ちっちゃいなー♡ 聞こえない、聞こえない……♡」

「んああああああ……っ！♡ も、もお、ステイブンさん……っ！♡ お……、おまんこしてえっ♡ ザップに♡ おまんこおおっ！♡ おまんこっ！♡ おまんこおおおおおおお……っ！♡」

「はははっ♡ そんなにおまんこして欲しい？♡ 何でもする？♡」

「うん、うん……っ！♡」

なりふり構えなくなってしまうところにするっ入り込んでくるから、この男は恐ろしい。致命的にやらかしてしまったとようやくザップが気付いたのは、パシヤン、という無機質な音が背後から聞こえてきてからのことだった。

「……っ、ステイ、ブン、さ……っ！♡」

「あっはっは、カメラ映えるなあーお前のココ♡ ピンクで♡ 可愛い♡ ザップの、お・ま・ん・こ……っ！♡」

「ひええええ……っ！♡」

パシヤン。カシヤン。カシヤ。連続するシャッター音に動揺しながらザップが振り向くと、やはり。しゃがみ込んだステイ

ブンがスマホを構え、あらぬところの撮影会を強行していた。いざその姿を目にしてもとても信じられそうにないのだが、他人にぐにい♡と菊門を開かされる感覚が、これは現実だとザップに思い知らせてくれる。

「なに!?♡ なんてっ!?♡ ステイブンさ、なにしてんの……っ!?♡ なん、で、俺の……っ！♡ ケツ穴ああああっ！♡ やめてっ、やめ……っ！♡」

「何でもするっお前が言ったんだろ♡ 男に二言はないよなあ、な、ザーツプ……!!♡」

「んう、でも、だつて……っ！♡」

こんなときだけ都合よく男扱いして、やつてることは下手なポルノよりえぐい。会話の間にもカシヤカシヤパシヤパシヤ、容赦なく撮影完了の合図が鳴り続けている。

ステイブンは親指と人差し指とで肛門を無理に伸ばし、縦に、横にと歪んだ窄まりを次々写真に収めた。ついにはフラッシュまで焚きだして、そのうえザップの臀部に体液まみれになったパンティを広げて乗せ、できあがった淫らな絵図を至近距離で、好き勝手に記録していく。

「ううう……っ！♡ いやああああ、やあああ……っ！♡」

「嘘は良くないな、嘘は♡ ほら分かるだろ、お前のココ……」

♡ 撮影してもらって大喜びしてるじゃないか♡ ぐねぐね俺の指に絡みついちゃってやーらしい……♡ ほれほれ

♡ ほじってあげよう、ほーじほーじ♡ ほじほじ♡ ほじほじ♡  
ほじ♡ ザップのおまんこほじほじほじ……♡

「ひああああああああああああ……っ！♡」

太い指が悪戯を始めると、ザップは甲高い悲鳴を上げた。何本もの異物が肛門から胎内に潜り込み、ぐに♡ぐに♡ぐに♡ぐに♡ぐに♡と小さな入り口を変形させる。奥まで差し込んでゆつくり手を引かれると、食欲な肉穴のふちがめくれ上がった。それから挿入したまま指を広げられ、蠕動する肉壁をくはあ……♡と露にされてしまう。

「あ、あ！♡ ナカ、ナカあ、撮られて……っ！♡」

「うん♡ ザップのピンクいおまんまん、画面いっぱいばつちり撮れてるよ♡ これ俺の携帯の待ち受け画像にしてやるっかあ♡ 誰かに見られたら困っちゃうねえ♡ おまんこの中のえつちなお肉なんて♡ 気安く他人に見せるもんじやないのにねえ……♡ しかもチョコレート色の可愛いおしりも映ってるから、それこそ誰が被写体なのかって知り合い連中にはすーぐバレちゃうかも♡ そうなっちゃうたらどうするう？♡ ねえザップ！♡ お前がおまんこの中まで写真に撮られてさっ♡ 彼どにそれ待ち受けにされて悦んじやうような変態さんだって皆に思われちゃったらどうしよっかーあ……!?!♡」

「ひああああん……っ！♡ あああ、やめてええええええ

……!♡ 超接写おつぷろげおまんこ♡ 待ち受けなんてっ、そんな、そんなあ……っ！♡」

まったくあり得ないことだが、混乱と動揺で頭がパニックっているせいで、妙に生々しくその場面を想像してしまった。

お宝映像だと言わんばかりの自慢げな素振りですマートフオンを差し出し、ステイブンがライブラの面々に、ザップのアナルの写真を見せびらかしている。縦、横、斜めとやりたい放題引つ張られて伸ばされてしまったどアップの尻穴が衆目に曝され、またその画像の大量つぷりに、男性陣だけでなく女性陣からも、変なテンションにはしゃいだ笑い声が響いた。

なぜだか、そんなことをしたステイブンへの批判は一切発せせず、被写体になってしまったザップに対してのみ、「スキモノですなあ」とか、「こんな淫乱猿だなんて知らなかった」とか、「私にもデータちょうだいよ。拡散するから♡」などと、下衆なりアクションが延々続く。そしてみな、男も女も、にやにやと好奇の目でザップの身体を舐め回すように見てくるのだ。

「ひ……っ♡」

ちゃんと服を着ているというのに、彼らの視線だけで、全部の衣服を剥がれているみたいに感じてしまう。それだけでは済まずに、会話の流れによってとうとう本当に脱がされることになってしまった。

「ねえ私たちにもホンモノ見せてよ！ この写真がフェイクじゃないか確かめてあげる♡」

「や、や……っ！♡ やめてくださいってそんな……！ ちよつと、ちよつと待って、ストップ、ストップ——！」

いやだと言っているのに何本も見知った手が伸びてきて、ザップの服を引き裂き剥ぎ取り、無理やり床に押さえつけて尻肉を割り開く。丸出しになってしまった肛門を指差して笑い、何枚も何十枚も写真を撮る。やめてやめてと騒いだところで、加虐者たちの標的になってしまった秘所を守るすべはない。

彼らはザップのアナルをつついてほじって大きく開かせ、その奥の匂いを嗅ぐような仕草でスマイルを決め、ピースサインで記念撮影をする。そのうえその辺にあった文房具やら、ティータム用のマドラー、活かてあった花や、清掃に使うほうき柄まで突っ込みだして、節操なくあれこれ飛び出させている尻穴の哀れさを笑ってはしゃいで映像に残して——。

「ひぐうううううううううんんん……っ！♡」

なんでそんなことまで妄想してしまったのか、本人にすら分からない。そんな扱いを受けることを望んでなどいないはず、なのに。ただどうしようもなく気持ち良くて、ザップのペニスにはバキバキに反り返り、とろとろ涎を零している。鳴り止まな

いシャッターの音に鼓膜まで犯されて、「あ、もうイクっ！♡」と叫んだ瞬間に。ちゆるりと、ザップのアナルを弄んでいた指がいつぺんに抜けていった。

「あ、あ、ウソおとおおお……っ♡」

完全に空振ってしまい、思わず未練がましい台詞が漏れる。そんなザップにはお構いなしのステイブンの手元から、ポオン、と今までと異なる電子音が鳴った。

「はーいザップ、次動画♡ 今度は声も入るからね、いっぱいすけべなこと言っていきまろ♡ 『おまんこ犯して♡』 っっておっきな声でおねだりしながら、一文字ずつお尻の穴きゅつきゅしてハメて欲しいアピールをしてください♡ ザップ♡ 下のおクチきゅつきゅで可愛くおねだり♡ おまんこ使って恥ずかしいおねだり動画撮ろ♡ これが出来たらもつと気持ち良くしてあげるから、ね♡ おまんこピクピクのお下品おねだりムービー撮ろ♡ 撮ろっ♡ さあ、早く……っ！♡」

「ひいひいひいひい……っ！♡」

逆らうこともできただろうに、そんな選択肢は見当たらなくなっていた。いきたくてもいけない苦しみから逃れたくて、それにもつと気持ち良くなりたくて、ザップはもじもじ膝を擦り合わせる。ふー♡ふー♡と熱い息を何度か吐き、尻穴の皺とこの皺に降り注ぐ視線を感じながら、ひくんとそこを動かした。

ステイブンのそれ、機械のそれ、また、先ほどの妄想が尾を引いてライブラの皆に注目されているような気になりつつ、排便の要領で肛門に力を入れる。

「あ、ふあ……っ♡ お……♡ お・ま・ん・こ……♡ おかし・て……っ！♡ こゝ、こゝ……っ！♡ おかして、くらさい……っ！♡ あう、あう、あう……っ！♡」

「そうそうその調子い！♡ もつとおつきな声で♡ 頑張っておねだりして？♡ ザップのどこを？♡ どうして欲しいの？♡ ほらファイト、ファイト！♡」

「うううううう……っ！♡」  
撮られていると分かっているながら、カメラに向けて、不浄の穴を収縮させている。頬を焼く鮮烈な羞恥に耐えて愚行に及んでいるのに、もつとやれと囁し立てられている。あまりのことに内股が震えていても、慈悲など与えられはしない。騾の行き届いた愛玩犬は、くうんと小さく鼻を鳴らして下劣な命に従った。

「こゝ、です、ザップの……っ、おまんこおおおおおおおにおおにおおにおお……っ！♡ ばっちりステイブンさんに動画撮られちゃってるっ、かあいそーな、穴……っ♡ こゝ、が……♡ おまんこ、ですううううううううううううっ！♡ ザップの、おまんこおおおにおおにおお……っ♡ いっしょけんめヒクつかせる、からっ♡ つお、か……っして

っ！♡ お・か・し・て……っ！♡ お・ま・ん・こ……っ♡ こゝおお！♡ 早くう、早くうううううう……っ！♡ おおにおおつ、ほおおにおおにおお……っ！♡」

「あはーあ♡ ピクピクおまんこえっちなねえ♡」

「ふえうううう……っ！♡」

言うことを聞いて道化を演じてやったのに、肝心のステイブンは上機嫌で尻穴鑑賞を決め込んでいる。そうじゃなくて、と焦る気持ちだが、ザップをさらに過激な方向へと暴走させた。  
「ち……が……！！♡ ちが、そんな、見てないで……っ！♡ ハメてよおおにおおにおおにおおお！♡ ハメて、イかせて……っ！♡ 言ってるでしょお!?!♡ お願いつ！♡ おまんこおつ！♡ 犯してえっ！♡ おまんこっ！♡ ステイブンさああんっ！♡ ねええ、お願いつ！♡ おまんこ犯してええっ！♡ ザップのおまんこ犯してよおお♡ 願いつ、お願いつ、お願いいいいいい……っ！♡」

「わーお♡」

ぷり♡ぷり♡ぷり♡と、引き締まった小尻が左右に振られている。小さな子供がやるのであればまだ可愛げもあっただろうが、過激な女装をした成人済み男性がやっているのだから倒錯感が凄まじい。

「かーわいっ♡ ザップはおまんこ犯してイかせて欲しくっつて、ケツ振り動画まで撮らせちゃうんだあ♡ そんなにお尻

ふりふり振っちゃって、よっぽどハマりたいんだなあって思われちゃうよ♡ 自主的にケツ振りまでして♡ みつとも

なーい♡ 恥ずかしくないの♡ ああいやそっか、ザップは恥ずかしいとイイんだっけ……♡ じゃあ尻文字でも書いてみるよ♡ おまんこ丸出しのお尻振って芸して、ザップ!♡」

「ああああああ……♡ は、い、ふあい♡ みつともなく、尻文字……♡ おまんこ丸出しのお尻振って♡ 芸しますうううううう……♡ カメラの前で♡ 尻振り芸♡ 恥ずかしいこと、します、からああああ……♡ あん♡ あん♡ あん♡ あん♡ ……♡」

「……♡ はははははは!♡ すごい!♡ ゲスい!♡ もーザップう、お前って奴は……!♡」

ぎりぎりまで尻を高く持ち上げ、ザップが必死に腰を振る。繰り返して空中になにかを描いて、それが大きなハートマークだと気付いたステイブンは膝を叩いて爆笑した。笑い声につられていきそうになっている芸達者な犬へ、ステイブンは新たに下品な悪ふざけを仕掛ける。

「あつなにい……♡ なに入れたの、今あああああ……♡」

「何って、お前の使用済み女おパンツ♡ これ入れてお尻尾みたいになったまんまおケツぷりぷりしてよすけべなワンちゃん♡ あつちこつちにおつきくケツ振って、雌犬っぷり発

揮して♡ はい、いっちに、いっちに……♡」

「はひい……♡」  
ステイブンの話す通りで、ザップの尻穴には、もろもろの体液にまみれた例の下端つこが突っ込まれていた。それが果たして犬の尾っぽに見えるのかどうなのか、というか、そもそもこの意味不明なブレイはいったいなんなのか。疑問もなくはなかったが、すでに興奮しきって酩酊状態のザップに抗うすべなどもはや存在しなかった。掠れ声で喘ぎながら、自分の意思で、大きく尻を横に振る。

「あ、あつ……!♡ メス犬、ですうううううう……♡ つ!♡ ザップは、メス犬う……♡ 恥知らずのメス犬ですからああああああ……♡ つ!♡ メス汁染み染みのおはんちゅ尻尾フリフリしてえつちな芸♡ しますからあああつ……♡ つ!♡ ももおねがつ、犯してえ♡ 犯してえつ!♡ まんこハメて♡ お願いまひゅ、わんわん、わん♡ ハメてえハメてえまんこハメてつ!♡ お願いでひゅからあ♡ パコられたいのおつ!♡ わんわんわんつ、わんわんわああああああああんんん……♡ つ!♡」

右に左に、大げさなモーションで臀部を突き出して、いかにも下品な尻振り芸が披露される。痴態をすべて撮影されているのだと思えば思うほど昂ってしまい、ザップはどうとう犬の鳴き真似までしていた。今度は尻を縦に振るので、ぱた♡ぱ

た♡ぱた♡ぱた♡とピンクのパンティが揺れ、ザップの股に何度も叩きつけられている。

「はっは♡ そっかそっか、わんわんわんだな！♡ お前、雌犬なんだもんなあ♡ いい声で鳴くねえ♡ 可愛い可愛いつ♡ ちゃあんと全部、撮ってるからなー♡」

「んおっ、お……っ！♡ 褒められ、っ♡ しゅご、これ、気持ちイイ……っ！♡ やらしいの褒められちゃったら♡ すっごいすっごいきぼちいい、よおおおおおおお……っ！♡」

叫ぶなり、ザップは両手を尻へと向けた。褐色の肌に指がめり込むぐらいの強さでぎゅむうううう……っ♡と肉を掴めば真横に肛門が開いて、銜え込んでいた下着をぼとんと、とシーツの上に落とす。無様な尻振りはやんだものの、今度はカメラの前で、淫らな桃肉が主役のショータイムが始まっていた。

「おっ、いい眺め……♡ そっかあ、お尻振るだけじゃ足んなくなっちゃったかあ……♡ じゃ、ケツまんこ奥まで撮られながらラストスパート頑張ろっか♡ これで最後の仕上げにしようね♡ ここからは、ライブラの皆にこのムービー見ってもらうつもりで……♡ 思いつきりえつちな気持ちになって、おまんこぐっぱあ撮影会しよ♡ 皆に分かるように自己紹介して、お名前だっっておっきな声で連呼して……♡ さんでおまんこぐっぱあだよ♡ ドキドキするね♡ 気持ちいいね

っ♡ ああほんと、淫乱なお前にびつたりの♡ 最高のシチュエーションだねええ……っ！♡」

「……ひっ、うううう……っ！♡」  
ひどいことを言われているのに。彼の指摘が的外れでないことは、ザップ自身が一番よく分かっていた。くはあ……♡と開いた尻穴が空気に触れてすうすうするのを知覚したなら、雌犬のペニスはいよいよそそり立ち、じわんと蜜を滴らせる。感じているのだ。自ら尻を挿んでアナルを、内側の肉までも曝しそこを映像に残させている、そんな状況で己は、途方もない悦を貪っている。

浅ましさが恥ずかしくて、身体が燃えそうなくらいに心地良い。媚びの滲んだ上ずった声で、ザップは淫らに言葉を紡いだ。

「あ、あ……♡ みんなあ……っ♡ お、れ、ザップ……♡ ザップ・レンフロ、ですううううう……っ♡ 今、俺……♡ おっ、おちんぼ、欲しくて……っ！♡ 全裸で、尻文字書かされたりしながら……♡ 動画っ、撮られてるのおおおとおおおとおおおとおおおとおおおっ！♡ 皆に見てもらおう動画っ、撮られてるうううう……♡ レオにも、魚にも……っ！♡ 旦那にも、姐さんにも、チェインにも見られちゃうっで分かりながらあつ！♡ おちんぼ欲しさにおまんこぐっぱあしていますっ！♡ おまんこぐっぱあつ！♡ 奥まで見てえええ♡ うんこ出すだけじゃなくってちんぼ入れる穴に

なっちゃった俺の……っ、おまんこおとおおとおおっ！  
 おまんこおとおおとおおとおおとおおっ！  
 おまんこ見てええええっ、ぐばあああああああああああ  
 ……何回もハメられてっ、すっかりちんぽの味覚えちやっただ俺のすけべ  
 穴ああ♡ どおぞっ♡ ばああっすりゆからあ♡ 奥ま  
 で見てっ！♡ ここにっ♡ ちんぽハメるのおおとおお  
 おっ！♡ いっぱいハメられたのおおとおおとおおとお  
 おお……っ！♡ ぶっとい雄ちんぽのハメ心地忘れらな  
 くなっちゃった俺のエロまんこ♡ くばあするから奥まで見  
 てえっ！♡ くばあ♡ ここにいい……っ♡ おちんぽ欲  
 しいよわんわんわんっ♡ 犯して欲しいのっ、わんわんわあ  
 あん……！♡ 俺の♡ ザップのお、くばまんこ！♡ お願  
 い♡ ハメてえ♡ もつと見てえ♡ カメラの前で自分で  
 ぐっばあしちやってるザップのこーもん、お尻の穴あ！♡  
 おまんこですう、ここおまんこになっちゃったのお♡ ステ  
 イブンのきょーあくデカ太おちんぽしまにおまんこ  
 にされちやっただのおおとおおっ！♡ おまんこ見てえ、わん  
 わん……っ！♡ 奥までジロジロ眺めてハメてええっ！  
 ♡ いっぱいパコってっ！♡ わんわん、わ……んひいい  
 いいいいいいいいおちんぽきたあああああああああ  
 ああああああ……っ！♡

「っは、挿入ただけでイキやがったこの雌……っ！♡」  
 予告なしに肉棒を根元まで突き入れてやると、ザップは絶叫  
 して果てた。強烈な締めつけにいやらしい笑みを浮かべながら、  
 ステイブンは愛しの肉体を蹂躪し、鋭く小刻みに貫いてやる。  
 赤い入れ墨が映えた下腹と褐色の尻肉とが激しくぶつかり合  
 い、ばん！♡ばん！♡ばん！♡ばん！♡と生々しい音を連  
 続して立てた。

「あっあっ！♡ あ……っ！♡……っ！♡  
 おちんぽおっ！♡ ちん、ぽおとおお……っ！♡」  
 「くっくっ、まだイってる……♡ えっただねえ？♡ よっ  
 ……と♡」

「ひあう……っ！♡」  
 ステイブンは繋がったまま強引に、後背位から正常位へと  
 体勢を変える。衝撃に喘いだザップに構わず彼の両足を掴み、  
 無理やりぐいと身を折り畳ませた。

「ふふ、アへ顔よく見えるう……♡ じゃあはい、自分でこれ  
 持つて♡」

「あ……っ！♡ あ、やだ、やだ、こんな……っ♡」  
 押しつけられた勢いに負けてV字開脚ポーズになってしま  
 ったザップが足を手離そうとすると、暗赤色の瞳がぎろり、と  
 威圧する。俺の言うことが聞けないのか、という強い強い視線  
 に屈し、ザップは情けなく唇を歪めた。







さすがのザップもぐったりして、もう声も出ない。下着を被せてしまったせいで細かい表情は確認できなかったが、荒い呼吸に快感の深さが窺えた。ステイブンは目の前の愛しいひとの姿に、思わずごくりと唾を飲む。本能的な加虐の悦びと、それとは別の、ほの暗い欲に突き動かされ、立ち上がってベッドサイドの引き出しへと向かった。目的のものを取り出して、再びザップのもとへと戻る。

「……………これで終わりだと思おうか……………?」

「ひ、……………あ、……………」

「サンブルは以上です！ 読んで頂いて有難うございました！ これでだいたい半分くらいです。残りもほぼ淫語エロです。」

←以下 R-18 シーン抜粋

◆ザップ×チェイン、ステイブン×チェイン妄想

「っはー……………お便器まんこたままないな♡ 可愛いお前の大事なおまんこ、こんな便器扱いしていいなんて……………♡ ハマる♡ ハマっちゃうよこんなの♡ 気持ちいいし、なんかすっごい満たされちゃうんだもん♡ これ覚

えちやったらもう他の便器なんて使いたくなくなっちゃうよ♡

♡ いつでもどこでも♡ お前にべろってお尻出させて、お便器まんこ使っちゃいたい♡ これから事務所です仕事してる

ときは使わせてもらうことにしようかな……………♡ 皆が働いて

る場所で♡ トイレの個室にこもって濃厚お便器プレイを愉

しむんだ……………♡ ほんとのほんとは堂々と、人前で使って

あげたいんだけどね♡ 執務室にライブメンバー全員揃

ってるタイミングで……………♡ 『おい』ってお前に声かけて、立

ったままボトムもパンツもずり下ろさせてぷりん♡♡♡♡お

ケツ出させるの♡ 『ごめんねちょっと催しちゃったから用

足すね♡』って僕が宣言してちんぽ出して、常識改変が起き

てたーれも止めなくてさ……………♡ 『お便器使うだけなん

だから別にフツッなはずだよな……………?♡』ってなんとなく

どぎまぎしながらチラチラこっち見てるとかいいなあ♡ 僕

は大きめちんぽ見せつけながら悠々とお前のケツ撫でたりし

て♡ 突き出させた尻の谷間で亀頭しごいて勃起させて、た

っぷり時間をかけつつ公然挿入ぐぶぐぶぐぶ……………♡

『あ……………♡ あ……………♡……………♡』ってお前

が喘ぐし、『ん……………ザップのまんこ気持ちいい♡ よく

出来たお便器まんこだなあ♡ ちんぽ大好きなんだよなあザ

ップのおまんこは♡ とつても可愛いよ小便器ちゃん♡

♡ 無償ご奉仕、ありがとね……………♡』って笑いながら僕

が腰振りだすから、皆仕事してるフリしてても全然目が離せないんだよ♡ ばん！♡ばん！♡ばん！♡ばん！♡ってピストンしてる音が部屋中に響いても、『セックスしてるみたいに見えるけど、あれは小便秘器使ってるだけだもんな？♡ なんかドキドキしてつい見ちゃう……♡ いけない、仕事仕事♡』とかってみーんな誤魔化されちゃってる♡ 少年は勃起しちゃってるし、チェインだってお股が濡れてぐっしりなのに全然おかしらなくて……♡ 僕はわざと彼らの近くに寄って、やらしいポーズをあれこれキメさせつつお前のまんこにちんぼハメまくる♡ テーブルに四つん這いにさせてアへ顔が皆に見えやすくなるようにしてあげながら背面フアックしたり♡ 少年の顔を跨がせて結合部見せつけながらねっとり腰捻ってばんばんしたり……♡ あとそうだな、服の上からチェインのおっぱいぎゅむぎゅむ♡ってお前に驚かせて、下半身がたがたになるくらいまでハードにフアックするのもいいよなあ♡ 僕がめっちゃくちやにお前のまんこ突きまくるから、お前は『あつおまんこっ！♡ おまんこきぼちいいっ！♡ ちんぼでおまんこたまんこやいよおとおおとおお……っ！♡ まんこ！♡ まんこ！♡ まんこっ！♡ おおとおお……っ！♡』って叫んでチェインの爆乳ぎゅううううううう……っ！♡♡♡

込むぐらい握っちゃうからチェインだつて必死になるよね♡ 『これはただの排泄行為なんだから……っ！♡ ステイーブンさんがお便秘器使うのに私の胸掴ませて協力してあげてるだけなんだから……っ！♡ 変な気分になるなんて絶対だめ、恥ずかしすぎるから絶対だめ……っ！♡』ってこらえようとするんだけど、おっぱい両方ともぐにゅんぐにゅん揉まれて形変わるぐらいまで引つ張られちゃうんだから我慢なんて出来るわけないよなあ♡ 『んっ！♡ あふっ♡ このお……っ！♡ 銀猿うっ！♡』って見当違いな文句垂れながら、まんこにハメてる僕も、まんこにハメられてるお前も、おっぱいぐいぐい掴まれてるチェインものすごい気持ち良くなっちゃ♡ 揉まれまくってるチェインの巨乳眺めながら僕は『ふたりとも準備万端だねえ♡ じゃあおしっこするねっ、三人で気持ち良くなるうっ！♡ えっちなおしっこっ、公開小便っ！♡ 出るっ、出るっ！♡ んんんんっ、んんんんん……っ！♡』って皆の前でしょんべんするの♡ 『ああああああ……っ！♡ おまんこにおちっこ♡ おちっこしやまあちや……っ！♡ おちっこひやばいっ♡ これひやばいっ！♡ おちっこ♡ おちっこおとおお……っ！♡ ああ……っ！♡』って叫んだお前はチェインのかパイもぎとりそうなくらい爪立ててるし、よりによ

って僕の目の前でおっぱいに滅茶苦茶されてるチェインはチ  
 エインで顔真っ赤にしてイかないように耐えてるんだけど♡  
 『あっ♡ あっ♡ お便器まんこきぼちいい♡ ひどくさ  
 れちゃってきぼちイイ♡ チェインの見てる前でザップのお  
 まんこおっ♡ 小便器まんこっ、きぼちいひよおとおおお  
 おおお……っ！♡』って喘ぎながらお前が力一杯ぎゅむんぎ  
 ゆむんデカ乳揉むから、『んはああああああああああああ  
 ああっ！♡』って処女声で鳴いてとうとうイっちゃうんだよ  
 ねえ♡ 下着もしっかり貫通して、黒いボトムのお股はぐっ  
 ちより濡れちゃってる……♡ 『おやおや♡ これはこれは、  
 うちのザップが悪いことをしたね……♡ 粗相させちゃって  
 ごめんねチェイン、すぐにお掃除させるからね♡』って、僕は  
 お前をけしかけて、彼女の股間を舐めさせるんだよ♡ 愛液  
 がたっぷり染みたま地をべろべろさせて、ちゅーっ♡ちゅ  
 るるるっ♡ぢゅぶるるる……♡ って何度も吸わせてやるか  
 らな！♡ チェインのおまんこの割れ目にびったり唇を当て  
 させて、ちゅばちゅばべろべろぢゅばちゅばちゅっ……っ  
 ♡ チェインの初物おまんまんのおツユをたっぷり嗅いで、  
 ちゅーちゅー飲んで♡ 『あっあっ犬女のマン汁おいひい♡  
 処女膜ついているまんまんから出たいやらしいジューズ、ほんと  
 にメス臭すっごいよお♡ 惚れた男の眼前で着衣イキした同  
 僚のいけないとこ嗅ぎながらおしっこされてゆ♡ チェイン

のおまんこの膨らみ感じながらっ♡ チェインの処女まんの  
 締めまり具合想像しながらメス汁ちゅーちゅーしてお便器プレ  
 イ……っ！♡ たまんにやい♡ 巨乳もみもみされてイっ  
 ちやっただすけべな処女のお股おいしい♡ お洋服越しにちゅ  
 ーちゅーできるくらいぐぢよ濡れになったチェインちゃんの  
 おまんちよエキス♡ おっぱいおつきなチェインちゃんの処  
 女窟穴からトロトロした淫乱汁飲みながらおちっこされんの  
 さいっこお……！♡ ステイブンの前でシルバーシッ  
 トにイカされちゃったポインちゃんのワレメべろべろ♡ 勃  
 起してるクリトリス舌でぐりぐりぐり……っ！♡ あつま  
 たおツユ増えてきたあ♡ えっちなお豆ちゃんべろでぐりぐ  
 りしたらまたお股ぐっちよりになつてきたあ！♡ 一緒にイ  
 こいこ、いっぱいイこ……っ！♡ チェインのお股べろべろ  
 させてもらいながらお便器なののおおおとおおおとおおお  
 っ！♡ えっちなお汁でべっちよべちよになった処女チェイ  
 ンちゃんのお股吸いながらいくっ♡ 色気なさすぎな黒スー  
 ツの下っ、やたら乳輪でっかくってだらしない、おぼこチェ  
 インちゃんのIカップばいばいのポリューミーなフォルム：  
 …っ♡ ナマで挿んだときの感触っ、アソコから愛液出まく  
 りで乳首も両方つうーん♡ っってとんがっちやっつるところお  
 ……っ！♡ 想像していくねっ♡ ザーっど好きだった人  
 の目の前でボトムの股間じつとりさせて天敵にちゅーちゅー

吸われちゃってる不憫なチェイン・皇ちゃんの♡ はしたな  
 あいヴァージンおまんこの真っ黒い縮れっ毛や、ぐちよぐちよ  
 にとろけてるワレメちゃんや、その中の……っ♡ しつかり  
 食べごろになっちゃった充血おまんこおっ！♡ だろだろぬ  
 るぬろのまだ男知らないピンクのまんまんのっ、ビラビラの形  
 とかクリちゃんの剥け具合とか膣穴の初物臭とかいろいろなえ  
 っちな想像しながら俺イクねっ！♡ ねえねえ、まんカス  
 舐めさせてえっ！♡ 好きな人の前でまんカスペリペリして  
 舐めてあげるからお毛々かき分けておまんこぐっばあしてく  
 れよお♡ 下だけ全部脱いでM字開脚して、処女まん限界ま  
 でぐっばああー……♡ っって自分でオープンし  
 て俺にまんカスどうぞして♡ ぜんぶ綺麗になめなめして  
 あげるから、俺にクンニされるとこステイブンさんに写真  
 撮ってもらおうよお♡ まんこにこびりついたまんカス舌で  
 指してにっこー♡ っって笑ってあげるから、お前の王子様にそ  
 こばっちり撮ってもらおうぜ♡ 好きな人に恥ずかしいとこ  
 撮ってもらおうのって気持ちいいよなあ♡ 俺におっぴろげま  
 んこ舐められてソッコーでイカされるとこ、動画なんて撮って  
 もらったらさいっこーに気持ちイイぞ♡ ああんっ！♡ っ  
 て処女らしからぬでっかい声で喘いで未開通まんこびくびく  
 ヒクつかせてマン汁溢れさせるとこ……っ！♡ いっちばん  
 見せたくなくて、でもほんとは一番見せたいひとにムービー撮

られて、やあ君って淫乱だったんだねえー♡ なんてニコニコ  
 普通っぽく笑われてみるよ♡ ぜーっってえ頭溶けるぞ！♡  
 気持ち良くってもっとひどいとこ撮られたくなるくらいまで  
 脳味噌トロけちゃう♡……

◆モブ×ザップ、モブ×ステイブン妄想

カッと羞恥で体温が上がり、脳内のスクリーンに映った場面  
 が切り替わる。

場所は同じく執務室だが、今度はステイブンとふたりきり  
 だ。そこに来客が訪れて、応じた副官と談笑をし始める。ステ  
 イブンに手招きで呼ばれたので、ザップは会釈して上司の横  
 に棒立ちになっていた。白髪の目立つ髪をなでつけ、上等なス  
 ーツに身を包んだ見知らぬ男をなんとはなしにぼんやり眺め  
 る。

唐突に、客人の手がザップの股間に伸び、服の上から陰茎の  
 輪郭を確かめる風にねっとり撫ぜた。ザップは驚くが、なぜ  
 だか抵抗してはいけないような気がして、困惑しつつ隣のステ  
 イブンへと顔を向ける。

「ああ、ご興味がおありですか？ これは見た目もこの通り、  
 具合も一級品ですよ。仕込みはきっちり済んでおりますので」

「いいねえ、それは良さそうだ。躰は君が？ ステイブーン」  
 「勿論ですとも。大切なお客様に粗相があつてはいけませんからね。僕が手ずから、つきつきりで指導してやりましたよ……」

「あ、あつ♡ あ……っ！♡」

物騒な会話をしながらも、服越しにペニスをまさぐる手は止まらない。もはやくつきりと勃ち上がってしまった箇所をあからさまに握って、しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡と上下にしがかれてしまっている。

「ところで君自身はどうなんだい？ こちらの彼もとびきりだけれど、君もそうとう……接待向きのルックスをしているじゃないか。調教できるってことは、男をもてなす手順はきっちり分かっているんだろう？ 礼は弾むよ、パトロンになりそうな知り合いを何人か紹介してもいい。このコとふたりでどうかな？ 私のご機嫌をとつてみる気はないかい」

「ははは。ご冗談を、ミスター。僕は『商品』ではないんですよ、残念ながら」

「なんと、それはもったいない。使い道は多そうだよ？ せつかくの商機をみすみす逃す君じゃないだろう」

「おやおや、僕を買いかぶつておられるようで。それではたとえ、あなただつたらどんな風にも僕らをお使いになりたいんです？」

「うん？ そうだねえ……」

「ひう♡ う、ひいん……っ！♡」

ここでも常識変化が起きているのか、ステイブーンも客の男も平然と、というよりこの状況を愉しんでいる様子だ。初対面の相手の性器を撫でまわしている無礼な手をぶつた切ることしかなできない。どうしてだか抗つてはならないという心地にさせられて、ザップは股ぐらの布地をぱんぱんに張らせたまま、ぐつと強く唇を噛む。

「私ならどうするかなあ……。まずは君らふたりを横並びに立たせてさ、服の上からココを両手で同時にいじって、期待に濡れた勃起ペニスをボトムへ恥ずかしい染みを作らせたいね！ 君らみたいな見目のいい男が、お漏らししたみたいにお股をぐつしより濡らして直立してたらさぞかし滑稽だろうなあ……。白い肌と褐色の肌だから、ふたり揃って尻を出させて、アナルの違いを見比べる鑑賞会をしても素晴らしいものになるだろうね。色や、皺の数や、匂いまで至近距離で愉しませて頂いて……。縦割れのこなれた尻穴がふたつ並ぶのもいいし、片方は熟れて、片方は男慣れせずに硬そうな感じだったりするのかもしれない。指を突っ込んでやっつてどちらが先にいくか競わせて遊んだり、交互に挿入して締めまり具合を比較しつつハメ倒したり♡ 道具使つていっぺんに喘がせて、男ふたりの淫語アへ声ハーモニーを堪能したらそれはもう最高だろうねえ♡







女から女を渡り歩くHLでも生粋のクス、

ザップ・レンフロ。

そんな彼が酔った勢いでセックスした——のは、

同性の上司、スティーブンだった！

まさかまさかの大事故発生、

とりあえずなかったことにはしたものの、

それで済むほど人生なんてラクじゃない。

さてさてどうする、どうなる、このふたり——!?

◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/乳首イキ/アナル舐め/連続潮吹き/JKコスプレ/下着も女装/ひよっこフェラ/精液の染みた下着をしゃぶる/静止画・動画撮影/アナル接写/尻振り/尻文字/異物挿入/犬プレイ/くぱぁ/女性用下着を頭に被る/主従プレイ/尿道ブジー/ペニスで旗振り/まんべ/ブリッジで精液排泄/ザーメン提灯/大小スカトロ/お掃除フェラ/タマ舐め/ダブルピース/血法で性的な芸/温泉浣腸/便器プレイ/聖水プレイ/まんぐりオナニー/セルフ顔射/電気あんま/犬コスで野外露出セックス/野糞/大便を嗅ぐ・舐める・掏う/謝罪オナニー/失禁/顔射/

※ステザップ前提、具体的な記述はないですがモブザップ描写があります※

※ステザップ前提ですが複数のカップリング妄想があります※

※妄想ですが具体的なモブステ、チェーンとの3P描写があります※

※妄想ですが具体的な獣姦描写、複数の犬相手の大小スカトロ描写があります※

・ライブラメンバー×ザップ

(羞恥プレイ/言葉責め/常識改変/全裸強要/静止画撮影/異物挿入/公然便器プレイ/)

・ザップ×チェーン

(羞恥プレイ/言葉責め/胸揉み/服の上から股間をしゃぶる/体型を性的に揶揄/まんカス舐め/くぱぁ/処女強奪/破瓜カウントダウン/中出しの回数カウント/精液排泄/3P/動画撮影/)

・スティーブン×チェーン

(羞恥プレイ/言葉責め/胸揉み/動画・静止画撮影/手マン/中出し精液直飲み/処女穴レビュー/二輪挿し/二穴攻め/3P/孕ませ示唆/体型を性的に揶揄/)

・モブ×ザップ&スティーブン

(羞恥プレイ/言葉責め/淫語おねだり/セクハラ/常識改変/アナル見比べ鑑賞/3P/性玩具挿入/ダブル連続潮吹き/向かい合わせブリッジで小スカ/動画撮影/射精ライブ配信/陰茎に記名ラクガキ/アヘ顔ダブルピース/陰茎振り/ダブルで大スカ/)

・モブ犬複数×ザップ

(アナル舐め/獣姦/お犬様呼び/顔面に排泄・射精・排便・大便塗りつけ/温泉浣腸/アナル舐め奉仕/お便器プレイ/大小お漏らし/食糞/)